

# 大阪産業大学 学会報

54

学園創立90周年記念号

特集1 明日への挑戦

特集2 10年後の日本と世界、そして大阪産業大学



# 2018

平成30年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)優秀賞作品  
『黄昏の川』  
楊 慶竜(人間環境学部 文化コミュニケーション学科)



## 10年後の日本と 世界を見据えた挑戦

中村 康範

大阪産業大学学会 会長(本学学長)

大阪産業大学学会は学生会員の多様な『挑戦』を育む学びを今まで以上にサポートするために、正会員の教員の方々から寄稿や学外見学会の参加報告、留学記等を頂いています。学生会員の皆さんは、そこから10年後の日本と世界を考えながら本学での正課活動そして正課外活動をイメージしてほしいと考えます。

年1回発行される今回の学会報の特集テーマは、『明日への挑戦』と『10年後の日本と世界』です。

私たちを取り巻く環境、社会構造は産業革命から“インダストリー4.0”へと大きく変化してきましたが、これからは“Society 5.0”(超スマート社会)社会へと、更に急激な社会・産業の変化が予想され、「生活」、「サービス」、「価値観」そして「働き方」が大きく変化し、サイバー空間とフィジカル(現実)空間を高度に融合させたシステムの中で経済発展と社会的課題の解決が模索されると考えられています。

卒業後の社会では、ダイバーシティ化したグローバル社会の中で新たなビジネスや価値を創造することが求められます。学生会員の皆さんは学生生活を通じて、この“Society 5.0”社会で必要とされる労働市場、技術革新の変化を見据えながら、強みとなるポータブル・スキルとして①文章や情報を正確に読み解き、対話する力、②科学的に思考・吟味し活用する力、③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力を在学中に身に付けて貰いたいと考えます。

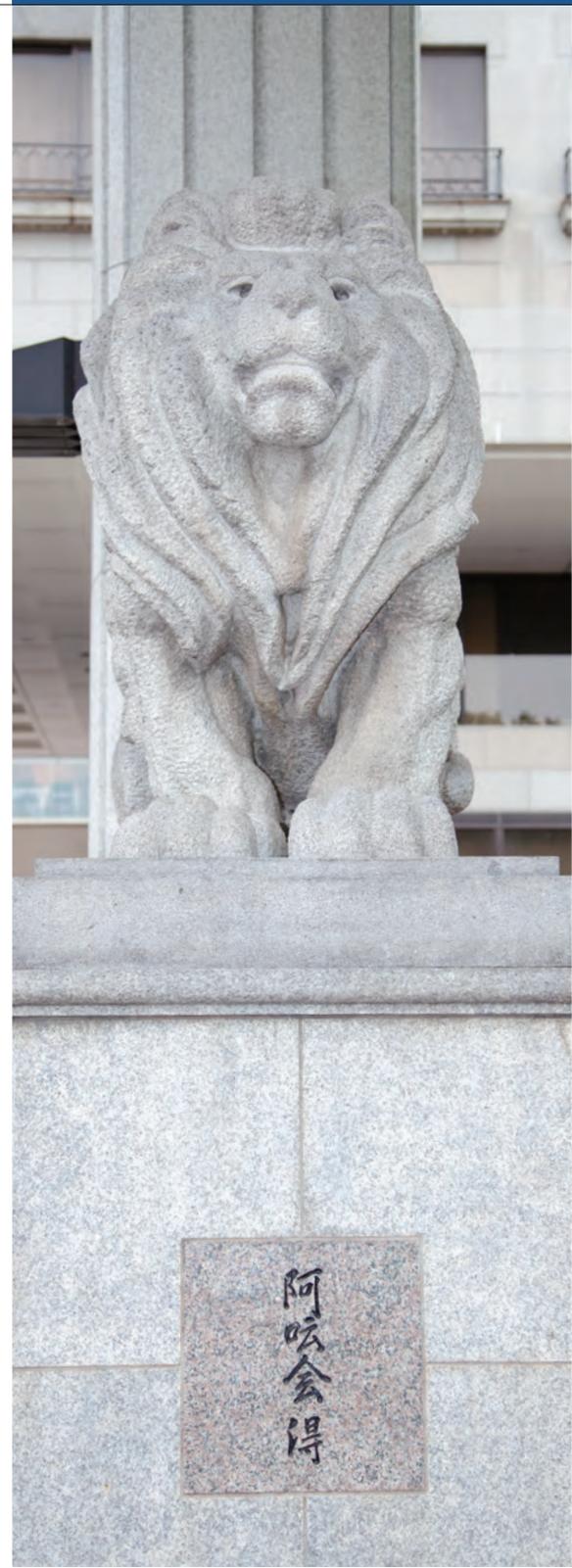
「文章や情報を正確に読み解く方法」として、学会が発行するこの機関誌で先生方の寄稿や学外見学会の参加報告、留学記等を読み解くことから始めてはいかがでしょうか。そして本学会が発行する「論集」は、講義等を担当される先生方の研究発表のダイジェスト版といえるものです。本学の知的ポテンシャルを知るのに良い機会です。

「好奇心・探求力を養う方法」として、「ぶんかくコンテスト」、「写真・イラストコンテスト」に応募やイベント参加(見学会、講演会等)、そして見学会プランニングコンテスト等に応募してみてください。

会員の皆様へは学内、国内より幅広い経験を培って貰うために海外研修、海外発表等に対しても支援を検討したいと考えております。

今後ともに、学生会員および正会員の活動支援に皆様のご協力とご理解をお願い申し上げます。

ACADEMIC  
SOCIETY  
OF  
OSAKA  
SANGYO  
UNIVERSITY  
2018



# CONTENTS [目次]

## 巻頭言

### 10年後の日本と世界を見据えた挑戦

大阪産業大学学会 会長(本学学長) 中村 康範

### 平成31年度学会行事予定一覧

4

## 06

### 特集1 明日への挑戦

主役は人	((株)ヒューマンコミュニティ)	古川 幸雄	6
ケータリング業界のエースを目指して	((株)エースケータリング)	宮本 聡	8
諦めず挑戦し続けることの大切さ	(デザインエッグ(株))	佐田 幸宏	10
変化に対応出来るグローバル人材を目指して	(SMC(株))	北川健太郎	12

## 16

### 特集2 10年後の日本と世界、そして大阪産業大学

ポップカルチャーの表現と政治の未来	(国際学部 国際学科)	佐藤 潤一	16
10年後に向けて大阪産業大学が			
創造すべき価値とは?	(スポーツ健康学部 スポーツ健康学科)	横井 豊彦	17
変化を恐れず、本質を見失わず	(経営学部 商学科)	田中 彰	18
「大交流時代」の到来と観光教育の必要性	(経済学部 国際経済学科)	小川 雅司	19
10年後の自分を創造するために	(デザイン工学部 建築環境デザイン学科)	船曳 悦子	20
自動車における「約束された10年」?	(工学部 交通機械工学科)	田代 勉	21
情報技術における10年後の世界	(工学部 電子情報通信工学科)	山崎 高弘	22
2018年は自然災害の多い年だった、			
はたして10年後の未来は?	(工学部 都市創造工学科)	水谷 夏樹	23
大学教育の一環としての学生相談・			
支援の視点から、10年後を思う	(全学教育機構)	橋本 尚子	24

### 学園創立90周年記念号に寄せて

リーダーシップのあり方に関する研究-「偉大なる平凡人たれ」を中心に	(経営学部 経営学科)	朴 容寛	26
-----------------------------------	-------------	------	----

## 32

### 学園創立90周年記念イベント

青柳美扇氏による書道パフォーマンスを見て	吉田 彩乃	32
学園創立90周年記念 学生企画を終えて	喜入 輝	34
新たな鉄道への一歩	森田 和真	36
関西フィルハーモニー管弦楽団クリスマスコンサート	吉向 宏恵	38

## 40

### 学会主催見学会

和菓子作り体験会に参加して	小藪 竜也	40
羽田機体工場見学会	塚田 耀大	41
4度目で最後の鈴鹿安全運転研修	市村 恵大	42
東京証券取引所と各種メディア見学会	八野 悟	43
神戸港の各種施設見学会の感想	劉 佼佼	45
学園創立90周年記念JAXA見学会ツアー	中村 詩祈	47
芸術鑑賞巡り(富山)感想	吉田 旭宏	49



<b>52</b>	<b>コンテスト報告</b>	平成30年度企画委員長	青山 一樹	52
-----------	----------------	-------------	-------	----

<b>58</b>	<b>留学記</b>	海外留学記「オーストラリア国立大学」	部谷 学	58
-----------	------------	--------------------	------	----

<b>62</b>	<b>学術研究書出版助成本の概要</b>	医療現場の「意図せざる結果」はなぜ生まれるか グローバル化とその反発——生活・移動・通商 新興国企業の成長戦略 —中国自動車産業が語る持たざる者の強み— 都市農業はみんなで支える時代へ —東京・大阪の農業振興と都市農地新法への期待— 路面電車レ・シ・ピ 住みやすいまちとLRT 大学卒業研究ゼミの質的研究 先輩・後輩関係がつくる 学びの文化への状況的学習論からのアプローチ	横井 豊彦 ———— 62 富澤 拓志 ———— 63 李 澤建 ———— 64 石原 肇 ———— 66 塚本 直幸 ———— 67 山田 嘉徳 ———— 68
-----------	----------------------	--	--

<b>72</b>	<b>学会後援事業</b>	EIM(Exercise is Medicine)Taiwanに出席して 経済学研究科・研究会についての報告 AI時代における経営・流通戦略に関する特別学術講演	嶋田 愛 ———— 72 福井 清一 ———— 73 朴 容寛 ———— 74
-----------	---------------	--	---

<b>78</b>	<b>学会報告</b>	平成30年度 年次報告 平成30年度 学会活動報告 平成29年度 学会会計報告	平成30年度学会常任委員長 大津山澄明 ———— 78 平成29年度財務委員長 齋藤 立滋 ———— 82 平成30年度編集委員長 米田 昇平
-----------	-------------	---	---

## 平成31年度学会行事予定一覧

# EVENT INFORMATION

4月	学会報配付 見学会実施予定ポスター 掲示	新入生・在学生に配布 (学内要所にも置いています)
7月	前期見学会参加受付 学会コンテスト募集(9月末まで)	学内各学部掲示板・学会公式webサイト・ポータルで案内
8月	1泊2日見学会説明会	
夏季休暇期間中	鈴鹿安全運転研修(1泊2日) 羽田機体工場見学会(1泊2日) 東京証券取引所と各種メディア見学会(1泊2日) 日帰り見学会	
9月	後期見学会参加受付	学内各学部掲示板・学会公式webサイト・ポータルで案内
10月	学会コンテスト書類審査・最終審査 ※優秀な作品は学会報に掲載されます 見学会プランニングコンテスト募集(11月まで)	
11月	芸術鑑賞巡り(1泊2日) 神戸港の各種施設見学会 和菓子作り体験会 (※新規見学先を検討中) 見学会プランニングコンテスト書類審査・最終審査 講演会	
※適時	学会主催・共催講演会	

※見学会、講演会等の学会企画事業については、適時、学会公式webサイトでもご案内します。

※コンテストの応募内容や詳しい情報は、学会公式webサイトや学内掲示のポスター等でご確認ください。

※各見学会は、募集人数に制限があります。詳しい内容につきましては学会公式webサイトやポスター等でご確認ください。

学会公式webサイト <https://as-osu.jp/>

### 大阪産業大学学会とは

「大阪産業大学学会」は、昭和39年(1964年)に設立された学術研究団体です。

本会は本学における学術・研究・教育の発展および普及に寄与し、あわせて学会会員の研究助成等を図ることを目的としています。これらの目的を遂行するため、「大阪産業大学論集」「大阪産業大学学会報」の発行、「学術講演会」等の講演会・研究会・シンポジウム・学外研修会の開催、教員会員だけでなく学生会員の研究教育活動の助成、海外留学の助成等の事業、さらには、主に学生会員を対象とする各種コンテストや様々の学外見学会を行っています。

〈学会に関する問合せ先〉

本館8階研究推進課事務室内 学会事務局 072-875-3001(内線:2815) お気軽にご連絡ください

特集1

# 明日への挑戦

特集1

Special Topics 1



平成30年度 写真・イラストコンテスト(イラスト部門)奨励賞作品  
『桜の彩る風景』  
藤田 佳奈恵(経済学部 国際経済学科)

# 主役は人

株式会社ヒューマンコミュニティ 代表取締役 古川 幸雄

## 現在、私は62歳。あと20年、今の仕事で挑戦し続けます！

私は現在、人材派遣・人材紹介・業務請負事業の会社を三社経営しています。

大学卒業後、何度か転職し、ホンダのトップセールスを経て、裸一貫ゼロからのスタートで20年以上、社長として社会で戦っています！

「主役は人」をモットーに、派遣従業員も一日2,000人以上働いており、官公庁、日本郵政、大手企業、中小企業等、多数のお得意様がおります。

又、帝国データバンク、銀行様からも高い評価を頂いております。



## 大学時代の思い出

経済的事情からアルバイトばかりしてしまっていて、正直テストの時は毎回大変でした。今思うと、学生時代にもっともっと真剣に勉強して、色々な知識を得ていれば、今のグローバルで複雑な時代の中で、より柔軟な考え方で物事に対応出来たのではないかと今更ながら反省している所です。

現役の学生の皆さんは、勉強は勿論の事、「様々な事に挑戦」し、多くの事を吸収する事です。そうすれば、将来へ向かって自分の進みたい方向性を明確にでき、多岐に渡り活躍できる幅が広がります。大いに猛勉強し、挑戦して下さい。

これは私が、40年の社会経験を経て、つくづく分かった事です！

## 「明日への挑戦」私の人生成功の為の考え方

私は、転職のたび、毎回ポジティブシンキングで、仕事はもとより、何事にも取り組んできました。逆風が来て、嫌になること、気持ちが折れそうになり逃げ出したくなる事も勿論ありましたが、その時は常に自分自身に「前を向け」「前を向け」と言い聞かせ、生きてきました。

私は、親一人、子一人の父子家庭育ち、その父も私が26歳の時に他界。その後、一人になりましたが、私は何があっても前へ前へという思いで生きてきたのです。

「明日への挑戦」という事で言うと、私には今、仕事以外で長年挑戦している事があります。それはマラソン！

現在、フルマラソンを60回以上完走しており、「ランナーズ」という雑誌の年間ランキング大阪で年齢別2位を記録しています。80歳を過ぎても走り続けることを目標に、現在毎週土日には50km走るということにも挑戦しています！

## 「明日への挑戦」成功する人/学生さんへ激励

学生の皆さんには、将来成功者になりたいという願望はあると思いますが、成功者で殆どの人がよく言われることがあります。「運が良かったから」と！

では、その運を自分自身に呼び寄せる為にはどうすれば良いのでしょうか？

それにはまず「基本をしっかり身に付けること」だと思います。基本をしっかり身に付ける事で、訪れるチャンスをしっかり捕まえることが出来ると思うのです。

『10,000時間の法則』という言葉があります。成功する為には、1日10時間、3年は継続して、基本に取り組む期

間が必要だという法則です。私もその通りだと思います。やはり、挑戦を成功に導く為には、修業の期間は必須です。

挑戦＝努力するに当たっては、その方向性・やり方も重要です。

そのためには、「良き人と付き合い、見識を深めていくこと」が誠に大切と考えます。

仕事と遊びのオン・オフの切り替え、心のゆとりも大いに必要です！

学生の皆さんは、常に前向きで、人のせいにせず、人に思いやりを持ち、「明日への挑戦」を忘れずに学生生活をエンジョイして下さい。そうすれば、きっと自分自身も成長しているはずです！



### これから先の人生

私は62歳になり、仕事の面では一応の成果を出して来ました。しかし、まだまだ未熟です。これからの20年が、自身の成長の集大成の期間と位置付け、頑張っていきます！

年齢とともに体力は減退しますが、経験・知恵はまだまだ増えていきます。これからも仕事、そして趣味のマラソン等、何かと楽しみを見つけては「挑戦」を続けていきたいと思えます。

「辛い事も成功への過程である」「ピンチをチャンスに置きかえられるプラス思考こそが勝利の因(基本)」との発想で!!

1979年 経営学部 経営学科 卒業

# ケータリング業界のエースを目指して

株式会社エースケータリング 代表取締役社長 宮本 聡

2018年8月1日で【起業】して丸10年となりました。

2007年3月に国際経済学科を卒業し、1年3ヶ月一般企業に勤めた私は個人事業主として10年前に開業しました。当時23歳だった私。経営に関しては右も左もわからず、親や親戚に経営者がいた訳でもなく「移動販売」という未知のジャンルで商売を始めました。お店を始めたかったのですが当時の私にはお金がなく、中古車(トラック)を1台購入し車内を改造したキッチンカーで全国を回り商売をしてきました。在学中は硬式野球部に所属し、学生生活の半分以上は部活動に時間を費やし、学生時代の思い出と言えば部活とアルバイトの記憶しか残っていないくらい勉強は二の次、三の次でした。学生時代の生活の中で私とビジネスとの接点は皆無で、ごくごく普通の日々を過ごした4年間でした。そんな私が一般企業を1年あまりで退職(脱サラ)し、自分で商売をしようと決意したのか。今思えば若かった私は夢と希望と勢いで起業を決断したのだと思います。当時の私には知識や経験、資格や人脈や技術、お金もありませんでした。それでも応援してくれる家族や仲間へのありがたさを力に代え、また私とともに時間を共有してくれる社員や取引先様への感謝を忘れず日々



取り組んで進んできた歩みがこの10年という歴史を刻んでいます。

今回の『挑戦』という文字が私の進んだ茨の道にはピッタリかも知れません。挑戦とは誰もがその条件や環境を整えば与えられるものであり、そこに性別や年齢は関係ありません。私は【起業】という挑戦をしました。私の場合、先が見えない未知の世界への挑戦でした。私が起業した時に一番必要だと感じたもの、それは『勇氣』でした。知識や技術やお金や自信や計画など、起業する際に必要なものは沢山あります。でも経験者の私が思う一番必要なものは『勇氣』です。勇氣が無ければ挑戦出来ません。勇氣はあるかないかではなく、出すか出さないか。勇氣は誰もが持っています。でも、その勇氣を出せないから道を切り開くことが出来ずに挑戦が出来ないということが多くあると思います。その当時、私には『勇氣』があったのだと思います。そして、『勇氣』だけではうまく行かないと思っています。勇氣と同じくらい大事なもの、それは『情熱』です。『勇氣』と『情熱』この2つの言葉の意味は全く違うものです。勇氣だけでは道は切り開けません。そこに『情熱』がなければ前に進むことは出来ないと思っています。逆にいくら情熱(大きな夢)があっても、そこに『勇氣』がなければ始めることが出来ません。この異なる2つの感情を大きく持つことによって自分の道を切り開けると、私は感じております。起業して10年経った今でも私は『勇氣』と『情熱』を持って今の経営にも生かしています。

現在は学生時代に経験してきたスポーツの知識を生かし、プロサッカーチームを始め様々なプロスポーツ会場の飲食ブースの企画や管理を行っております。スポーツをしてきた私だからこそ提案出来る企画や、観戦に来られたお客様にどれだけ飲食を楽しんでもらえるかを日々追求し、仕事をしています。また、一流アスリートの苦勞を身近で感じることや、マイナースポーツの人気向上に一役かえるようなことを常に探しアクションを起こしています。また、4年間お世話になった母校の硬式野球部に対し、春と秋のリーグ戦前には現役選手達への激励の意味を含め、食事の提供なども行っております。このような行動は

自己満足かもしれませんが、私自身が率先して先頭に立ち行動するようにしています。従業員に任せることも出来るかも知れませんが、私が第一線で現場に出なくては意味がないと思って行動しています。その姿を後輩達が見ることで、夢や希望を持ってもらうことと、1人でも多くの学生(後輩達)が『勇気』と『情熱』を持って、これからの人生に『挑戦』することへの後押しになればと思っています。野球をしていた頃、エースピッチャーになりたくて日々頑張っていました。どうせやるなら“ケータリング”業界の“エース”を目指したい!それが「エースケータリング」、会社名の由来です。今もなお、エースを目指して邁進しています。

2007年 経済学部 国際経済学科 卒業



# 諦めず挑戦し続けることの大切さ

デザインエッグ株式会社 代表取締役CEO 佐田 幸宏

デザインエッグ株式会社という会社を2010年に創業し、現在は4,980円だけで紙の本が出版できるサービスを提供しております。おかげさまで多くの大学に教科書として利用いただいております。関西では近畿大学、関西学院大学、摂南大学、大阪工業大学で採用いただきました。我が母校でも使っていただけることを期待しております。

私は大阪産業大学に2003年に工学部の情報システム工学科(現 デザイン工学部 情報システム学科)に入学しました。大学院は工学研究科のアントレプレナー専攻でお世話になり2009年に卒業いたしました。貴重な機会をいただきましたので、大学の在学時から現在に至るまでの軌跡をここで紹介したいと思います。

## 「情報の古い高額な教科書」に疑問を持った学部生時代

私の在学中、20年以上前に出版された教科書を使っている講義がありました。古い情報でしたので、講義中には補足として沢山のプリントが配られ、とても不便に思いました。古い教科書を利用している理由を先生に聞いたところ、本の内容を変更するには多くの費用が発生するため、授業で手間がかかることを承知でそのまま使っていたそうです。

この時に感じた課題意識はずっと私の中に残っておりました。情報システム学科での卒業研究は「書籍の管理システム」。当時、研究に必要なプログラムの重要な部分を手伝ってくれた同じ研究室の友人である安井君は、私の会社の創業メンバーです。



▲研究室にて(手前右側が筆者)

## ITとは全く無縁の業界に就職した新卒時代

2009年、大学を卒業した私は大阪にあるポンプメーカーに勤めました。情報工学を学んだ私が、IT業界ではなくメーカーを選んだ理由は、私のスキルではIT業界では凄い方の中に埋もれてしまうと考えたからです。学生時代の経験により、私の能力は「問題の発見と解決手段を考えること」だと思っていました。ですので、IT化が遅れている業界で業務を効率化することこそが、私の能力を活かせる道と考えたのです。

たった2年しか在籍しませんでした。営業効率化システムをいくつも開発しました。当時の同期によると、新卒時代に私が企画したシステムは10年たった今も使われているようですので、一定の成果は出せたのではないかと考えております。

## 起業のきっかけ

「いつか起業をしたい」という思いだけは学生時代からありましたが、具体的なアイデアがあったわけではありません。起業セミナーなどを受けたこともありません。

起業のきっかけは2010年3月のiPadの発表でした。「本を何冊も持ち歩け、紙の本が不要になる！」学生時代から感じている課題が解決できるのではないかと、とても興奮しました。その日の大阪は雨。仕事が終わった後、傘をさしながら「世界を変えるような電子書籍サービスを作ろう！」と高根研究室で一番プログラムができた安井君に電話をしました。そして、2ヶ月後の2010年5月、デザインエッグ株式会社を創業しました。

## 売上がなかった3年

2010年に創業したものの、会社員としての仕事もやりがいがあったためすぐに辞めることができず、創業後1年間は会社員としての仕事が終わってから、デザインエッグ株式会社の業務をしていました。

今、大阪では起業家がどんどん増えております。ベンチャー企業を応援するプログラムも盛んで、弊社も2014年にKDDI株式会社が提供するベンチャー育成プログラムに

参加させていただき、多くを学ぶ事ができました。しかしながら、2010年の起業当時、ベンチャー企業にもITにも触れていなかった私が起業してもうまくいくはずがありません。

創業時は電子書籍のサービスを開発していましたが、1年半も開発に時間をかけたにも関わらず、売上はゼロ。すぐに資本金は底を突き、会社のお金が3万円になったこともありました。打ち合わせ場所も用意することができず、学部時代にお世話になった情報システム学科の高根研究室で会議を行っていました。現在当社のメイン事業になっているサービスが完成したのが2013年の春、まとまった売上が入ってくるまでになったのは2014年になってからです。今では社員と海外旅行に行くこともできますが、本当にしんどかった最初の3年間を忘れることはありません。



▲KDDIムゲンラボ7期アモイでのプレゼンの様子

### 電子書籍の失敗から生まれた全く新しい出版サービス

出版というと、沢山の本を印刷し本屋に並べることだと信じる方が多くいます。実際には多くの本は売れず、印刷した本の4割が出版社に戻っています。

学生時代や起業当時、私が問題だと感じたのは、大量の在庫によって本の内容が新しくできない事であり、印刷しない電子書籍こそが解決策であると考えたのです。しかしながら当時、電子書籍サービスは全く売れませんでした。なぜなら多くの人は紙へのあこがれが強く、電子書籍は“妥協”であると考えたためです。

電子書籍での手痛い失敗の後、私は「本を1冊から印刷・製本できる技術」を見つけました。この技術を用い、在庫を持つことなく、完全受注生産で本を作るようにしたのが「MyISBN」や「ムゲンブックス」といった弊社の出版サービスです。インターネットや書店から注文が入った後に本を印

刷して送ることで、資源やお金の無駄がゼロになりました。1冊も在庫を持たない出版社は日本で唯一だと思います。

今ではAmazonで購入後、2日程度で自宅に本が届きます。書店から取り寄せることもできるため、教科書として多くの大学で利用されています。

2004年の学生時代に疑問を持って15年、「教科書の内容が古く配布資料が多い」という問題にこんなに長く取り組むとは思っていませんでした。ようやく問題を解決できたことを嬉しく思います。



▲2013年から運営している紙の本の出版サービスMyISBN

### 挑戦し続けることの大切さ

2010年に起業して現在9期目、今では多くの方に利用されている出版サービスも、リリース当初は色々な妨害を受けるなど、大変なことが沢山ありました。創業以来、年々大きな、より困難な問題が発生しています。ただし、どんな時も自分の能力の限界を超えて挑戦をする必要があります。

創業当時は会社員も続けていたので、夜3時まで自社の打ち合わせをして、6時に家を出る生活を1年近く続けました。会社員を辞めたときは全くプログラムが書けませんでしたので、1日18時間プログラムを書きました。しかしながら、完成したサービスの獲得ユーザーは5人、完全に失敗でした。それでも諦めず何度も新しいサービスを作り続け、7つ目のサービスとして「MyISBN」が生まれました。

世の中は“挑戦の結果の成功事例”ばかりが取り上げられますが、挑戦の多くは失敗に終わります。しかし、挑戦しない限り成功もありません。何度失敗しても、自分の人生を諦めず挑戦し続けることが大切だと思います。

2003年 工学部 情報システム工学科  
(現 デザイン工学部 情報システム学科) 卒業

# 変化に対応出来るグローバル人材を目指して

SMC株式会社 北川 健太郎

学園創立90周年おめでとう御座います。2007年3月に人間環境学部都市環境学科を卒業して十余年経ちますが、今でも時折当時を思い出しては懐かしい気分になることが御座います。卒業して以降、私は空気圧制御機器といわれる機械部品のメーカーに営業として勤務しており、本学在学中に取り組んだ語学(英語)を活かして2011年から5年間、東欧オーストリアに向向する機会も御座いました。

昨今、技術の進歩により周囲を取り巻く環境は目紛しく変化しております。その中で私は仕事を通じて、その変化に対応出来るグローバル人材を目指しております。今回の寄稿を通じて、その挑戦の発端となった在学当時の思い出や卒業してからの社会人生活、将来を見据えた現在の取組みについて少しご紹介させていただきます。

大学時代に語学に取り組むきっかけとなったのが、入学間もなく受験した学内のTOEICテストでした。結果は芳しくなかったものの、当時別クラスの英語担当をされていた教授より激励頂き、担当外の学生にも関わらず、参考書の紹介や履修すべきコースについて手厚くご指導を頂きました。教授の勧めで2年生の時に自身初の海外渡航となる英国ブライトン大学短期留学コースを履修し、自分の語学で赤の他人と意思疎通出来る「楽しさ」や「達成感」を体験出来た記憶は今でも鮮明です。その後、学内の派遣留学制度を通じて1年間米国オレゴン州立大学に留学した経験は自身の進路を決定づける貴重なものとなりました。

充実した大学生活は4年で終わり、入学当時500点に満たなかったTOEICのスコアは卒業時に900点を超えるまで成長する事が出来ました。一重に大学在学中に頂いた機会のおかげだと感謝しております。

就職してからは4年の国内営業を経て海外勤務となりましたが、赴任した東欧で肌身で感じたのは、自分の意見を明確に示す重要性和相手の意見を尊重する協調性のバランスが如何に大切かという事でした。東欧地域では



ハンガリー・チェコ・ポーランドをはじめとする様々な国籍の同僚・顧客と接する機会がありましたが、特に日系企業顧客に於いては日本式のサービスを求められる場合があり、その意味や重要性を現地スタッフに理解して貰う説得力が求められました。その中で日本人の意見を通し過ぎるとチーム力の低下を招き、孤立してしまう失敗もありました。今後更にグローバルに対応できる人材となる為には、場数をこなしてバランス感覚を磨く必要があると考えており、日々仕事を通じて機会があれば国や地域を問わず積極的に携わっております。

身近な生活でもスマートフォンやAIスピーカー、自動運転技術に至るまで、様々な新しい技術の台頭で変化が激

しい昨今ですが、製造業の自動化分野に於いても例外なく変化の流れが感じられます。ロボット技術の発展やモーター動力の普及、センサーの高機能多様化など新しい技術が汎用性を持ち、コストダウンに伴い新たに取り入れられる現状を日々の営業活動を通じて実感しております。一方で古い技術も簡単な操作性やコスト面でまだまだ優位な点があり、用途に応じて最適な提案を行う必要が御座います。常にアンテナを張って顧客の話に耳を傾け、変化の流れを把握して将来の製品づくりや提案に繋げていく事もメーカーの営業職としての「明日への挑戦」だと認識しております。

最後になりますが、大学の教育現場に於いてもグローバル化や新しい技術を取り入れた教育手段の多様化は、時代の変化とともに直面しているテーマだと考えております。新時代の「偉大なる平凡人」輩出にむけ、今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

2007年 人間環境学部 都市環境学科 卒業



▲平成30年度 写真・イラストコンテスト(イラスト部門)作品  
『夜に太陽を』  
松井 月菜(人間環境学部 生活環境学科)

特集2

# 10年後の日本と世界、そして大阪産業大学

特集2

Special Topics 2



平成30年度 写真・イラストコンテスト(イラスト部門)優秀賞作品  
『自然ということ』  
大西 叶恵(デザイン工学部 情報システム学科)

# ポップカルチャーの表現と政治の未来

国際学部 国際学科 教授 佐藤 潤一

なんて変なタイトルだと思ったかもしれない。ポップカルチャーという言葉よりも、サブカルチャーとか周辺文化といったほうがよいか。日本だとサブカルチャーよりも少しマイナーなというか、アングラなというか、主流からは見下される文化現象をこういう風に呼ぶことがある。よくわからんという人は、マンガ、ライトノベル、アイドル(歌)、漫才師、舞台等々、なんとなく趣味で関心をもって見たり読んだりする対象だと思ってほしい。

わたしの本来の専門は法律学だ。憲法の研究が中心だけれど、外国人の人権保障が研究の出発点だったので、他国の憲法や国際人権法なんかも学び、その延長で国際関係論や平和学についても学び研究している。で、この二つのことがどうかかわるんだろう？

ポップカルチャー作品は、人の悩みや人の心の動きがテーマになることももちろん多いけれど、社会状況に対する批判や、直接間接の政府に対する批判というのも昔から主要なテーマのひとつだった。政治にかかわることがグサいと、多数決で選ばれた与党や首相に対して批判すること自体を、まるで良くないことのように思う風潮も近年見受けられる。でも、本来社会に対する不満を言葉に乗せて発することは昔から表現行為の中心だった。Led ZeppelinのImmigrant Songとか、忌野清志郎が日本語歌詞をつけた、デイドリームビリーバーとか聞いたことはないかな。マンガでも、政治を直接扱う作品も多くあるし、ライトノベルでも、そうだなあ、幼女戦記なんてのもある意味そうだな。揶揄だったり正面からだったりいろいろだけれど、こういう作品が自由に書けるということはとても大切な。揶揄、批判、そういった表現に対して、政府を批判するとは何事だ、というような「批判」が流布されてしまうことがある。政治の未来を予測するということには、政治に対する批判等を扱うポップカルチャー作品の表現が自由に行われることが条件となるはずなのだ。

「表現の自由」は、憲法で保障されている人権の中でも重要視されるもののひとつだけれど、なんとなく、政治的表現行為はともかく、それと直接関係ないようなポップカルチャー表現については、「わいせつだから青少年に有害

で、多少の制限はやむを得ない」というような主張がしばしば声高に主張される。現在の日本社会では、各地の条例で青少年保護育成条例等の名称で、わいせつ文書取締りがしばしば正当化されるけれども、実際には、上で少し触れたように、本当は政府にとって都合が悪いからその書籍等が処分されているかもしれないのだ。だからこそ、表現に優劣をつけることなく、すべて人権としての表現の自由の対象となることが原則となるはずなのだ。

もちろんここで難しいのは、いわゆるヘイトスピーチはどうなるのだということ。憎悪言論とかヘイトクライムの問題といっても良いけれども。ポップカルチャーの中で、マンガやライトノベルという媒体等で、そういった主張を肯定的に扱うような「作品」をどうするのだということである。

政治の未来は、選挙制度を変えとか、移民をどう考えるのかとか、もちろんそういったことだけではない。このことを、学生のみなさんには是非考えてもらいたい。将来実現して欲しい政策、だけでなく、国際関係の将来を考えていく上でも、狭い視野では全く不十分なのだ。大学でという専攻を選んだとしても、その専攻分野だけでは、ここで述べてきたようなことに答えはだせないだろう。幅広い「教養」を身につけることは、たんにペダンチックな姿勢などではなく、国の将来にもかかわってくる。そういうことを大学で身につけて欲しいなどと願って教育に取り組んできたし、今後もそうしていきたいと考えている。

# 10年後に向けて 大阪産業大学が創造すべき価値とは？

スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 教授 横井 豊彦

これからの10年を考えるにあたり、過去の10年を振り返ると、2008年、日本では人口問題や、それに付随する教育や、医療・介護の問題が顕在化し、既に社会的課題となっていた。また、世界的には、資本主義諸国がリーマンショックに直面し、経済不況からどのように立ち上がるかを模索しつつ、様々な手を打ち始めた時期であった。

研究の視点からも、10年前は大きな契機だったと捉えられる。

公的研究費の削減と、特定の分野の強化(裏を返せば偏り)が始まった。ノーベル賞を受賞された山中伸弥教授が、研究費を集めるために「マラソン」を通じてメッセージを出されていたことが記憶に新しい。平たく見て、ノーベル賞受賞研究者が社会にメッセージを届ける目的ではなく、「研究費」を集めるための活動をせざるをえない状況は、人々に希望を与えるものとは考え難い。今に至っては、短期間に「役に立たない」研究は切り捨てられる傾向さえ見て取れる。

では、教育はどうか？この点は、案外強い印象がない。というのも少子化のために、学校などのインフラ部分は、却って余剰があったからかもしれない。しかし、学校教員の労働時間、加重労働が顕在化し、問題になり始めたのは、この10年である。この過程では、企業の加重労働も顕在化し、相乗的に社会問題化してきた経緯がある。ここからは、学校教員のストレスなどの実態も垣間見えて来た。このことは、これから教育を受ける人達やその保護者に対して、どのような意味があるのか。

冒頭で述べた、これまで「社会保障」とされて来た医療・介護では、今世紀に入る前から、医療・介護保険の見直しという形で、経済的動機から、「削減」の方向へと舵は切られて来た。とはいえ、日本という国は国民皆保険、社会保障としての医療・介護を堅持する方向ではいるようである。同様に、社会基盤としての教育もまた然りであろうと、考えておきたいと感じる昨今である。

しかし、このような状況が10年続き、マクロでの経済成長はあるとされつつも、多くの人が景気回復を実感出来ない状況の中で、備えておかざるをえない事がある。

一つは社会保障の市場化である。例えばアメリカのような自由な医療市場である。アメリカから学ぶことは、国家的な社会保障がない場合には、必ず人々の「不安」を支えるための保険業者が存在するという事である。実際、アメリカでは特定の低所得者層と高齢者層以外は、健康保険は個人負担で相対的に割高であることが知られている。かつて、黒字だった郵政事業を根拠なく民営化した事を、あの富永健一教授が真っ向から批判された事が記憶に蘇る。

では、もし教育が自由化されるとどうなるのか。そのような状況が世界にあるのか…筆者は恥ずかしながら最近まで未知であったが、アメリカには、義務教育というものがない。初等教育からそうであるため、収入や地区によって教育の偏りが著しいらしい。何の場合も、教育業者がコーディネートしたプログラム内の学校に契約・加入することになる。そのため、玉石混交で、価格の高いプログラムは非常に充実している一方、安いプログラムになると、「教員」は数日の講習を受けるだけで「認証」され、マニュアルを持って現場に出ることがあるという。また、彼らの処遇は不安定であるらしい。

次の10年、少子化に加え、労働年齢人口の減少のために短期間に景気が良くならない可能性も加味すると、大産大に求められている事は高等教育における新たな価値創造以外の何物でもないだろう。それも旧帝大や名門と言われる私立大学とは全く異なる文脈での価値創造が必要…と思う今日この頃である。

# 変化を恐れず、本質を見失わず

経営学部 商学科 教授 田中 彰

今年74歳になった母親がインターネット通販で化粧品  
の買い物をする。浪人生である息子は受験用テキスト  
をスマートフォンで短時間に探し出しては、その都度で私  
に購入を依頼してくる。もはや時代が時代なのであるが、  
私が研究分野としているスポーツビジネスの世界でも激  
動の時代を迎えているようだ。少年時代のかすかな記憶  
には長い行列を経てチケットを確保した父に、手を引かれ  
て甲子園球場に入ったシーンがある。スタンドに入ると父  
は小型クーラーボックスから缶ビールを取り出し、私には  
缶ジュースを手渡してから最前列の選手に歓声を挙げたも  
のだった。観戦後のチケット半券は、父と楽しいひと時を  
過ごした思い出の品として長らく大切に保存していたのを  
憶えている。

あれから40年弱が過ぎたが、今日の米国アメリカン  
フットボール界ではスタジアムの各ゲートに金属探知機  
が設置されており、缶製品はもちろんカバンでさえも一部  
を除き観客席には持ち込めない。そして非常に驚くのは  
紙で発行されたチケットが存在しないことだ。観戦者は代  
わりにスマートフォンやタブレット等で購入証明となるQR  
コードを提示してスタジアムにはいるのであるが、これら  
は不正転売防止にも役立っている一方で、各球団には非  
常に重要なマーケティングツールになっている。各球団の  
マーケティングは顧客端末による購入情報から新たな需要  
を予測して、各球団の近未来の商機をどん欲に伺う。また  
平日や週末の試合コンディションによっては、同じ席にも  
関わらずチケット価格が違うことは日常茶飯事なようだ。  
これらは顧客満足、アスリート(選手)の満足、満員のスタ  
ジアムの臨場感、球団収支の最適化を常に追求するビジ  
ネスシステムの一部である。この最新アメリカ事例には隔  
世の感が否めないが、実は日本のプロ野球界もパシフィ  
クリーグを起点として2004年以降から経営改革が本格  
化されている。航空会社と同様の繁忙閑散を反映したチ  
ケットシステムが導入されていたり、携帯端末を通じて顧  
客へのリコメンド機能を駆使している球団も少なくない。  
某調査では日本の伝統球団であり、長年にわたって圧倒  
的人気を誇っていた読売ジャイアンツの顧客満足度が、

全12球団の中で下位グループに甘んじる結果がでるな  
ど、日本スポーツビジネス界も変化が激しい。

さて今後の10年を想像すると、数多くのイノベーション  
により果たして何が変わるのか。もはや我々の想像の中で  
語ることは限界さえ感じる。2020年の東京五輪では無  
人運転で空中移動の未来カーが開会式を演出するの  
は…。そんな夢のような噂が語られたり、近未来の暮らし  
について色々な憶測や夢が聞こえてくる中で、ここではあ  
る自動車メーカーの幹部の方の一言が胸に響いたので  
紹介したいと思う。それは「これからの大量データ社会で  
はビッグデータと、ビッグディシジョンをどう駆使するの  
かが肝要だ。」というものだ。

大阪産業大学で教員として勤務する自身には非常にイン  
パクトある言葉であり、大切な使命を頂いたような気持  
ちになる。この学び舎を巣立った卒業生が、各人の日常生  
活でどのような決定を下していくのか。各家庭での大きな  
岐路に面してはどのような判断をしていくのか。その判断  
の際にはどのようなデータと、どのような付き合い方をす  
めるのか。つまりどのような大量データ時代になっても、変  
えてはならない各自の判断基準を大切にできる人材を育  
成して、変化にあ  
ふれた世界と向  
き合う。そして世  
の中の変化に対  
応し続ける。「何  
を変えてはいけな  
くて、何を变える  
べきなのか」。そ  
のような自問自  
答を繰り返しな  
がら、常にフット  
ワーク軽い研究  
者・教育者であ  
りたい。これが私  
の目標である。



▲写真① 田中ゼミ2018・スポーツマーケティング研修@甲子園球場(7月)



▲写真② 田中ゼミ2018・観光地マーケティング調査入門合宿(9月)

# 「大交流時代」の到来と観光教育の必要性

経済学部 国際経済学科 教授 小川 雅司

UNWTO(国連世界観光機関：The World Tourism Organization of the United Nations)の『Tourism Highlights, 2017 Edition』をみると、世界における国際観光の実態を知ることができる。2016年1年間の国際観光客数(国際観光客到着数)は12億3,500万人であるが、この値は2010年から2020年までに3.8%増加し、さらに、2020年から2030年の間に2.9%も伸びると予測されている。そして、この推計にもとづくと、2030年の国際観光客数は年間18億人に到達するという。

2003年1月、当時の内閣総理大臣であった小泉純一郎氏は「観光立国」を宣言し、同年4月に「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を開始した。これまで、わが国の産業は「モノづくり」が中心であったが、政府が積極的に観光振興に取り組むことを決意した重要な年である。その後、2006年には、観光基本法に代わる観光立国推進基本法を制定し、翌年には、観光立国推進基本計画が策定された。そして、2008年には、観光振興をより戦略的に推進すべく、観光庁を創設した。

このような背景には、本格的な人口減少社会の到来があり、人口減少によって低迷が危惧される消費を喚起する狙いがある。国立社会保障・人口問題研究所編『日本の将来推計人口：平成29年推計』の出生中位推計によると、わが国の人口は、2008年の1億2,808万人をピークに、2053年には1億人を割り、2065年には8,807万人にまで減少する。このような人口減少社会の処方箋として登場したのが、定住人口を交流人口(観光客)で補填するという発想、つまり、観光振興への取り組みである。

また、観光に関連する経済波及効果は相対的に大きい。観光庁の『旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究(2016年)』によると、2016年のわが国の国内旅行消費額(内部観光消費額)は26兆4,000億円であり、そこから生じる経済波及効果は、生産波及効果で53兆8,000億円、付加価値効果で26兆7,000億円、雇用誘発効果で459万人、税収効果(試算)で4兆7,000億円と推計されている。項目によって、若干の違いはあるが、わが国の経済の概ね5%を観光産業が支えていると言えよう。

デービット・アトキンソンは、2015年刊行の『新・観光立国論』において、日本を「観光後進国」と指摘しているが、今後、すべきことを確実に実行すれば、わが国の観光ビジネスは飛躍的に成長する、と述べている。このように、観光は「新成長産業」であり、それゆえに、わが国の観光分野をリードする人財の育成が急務である。

ところで、本学経済学部には、「観光ビジネスコース」という特別コースがあり、トラベル・ビジネス論や観光経済実務演習など、経済学の視点から、観光を学べる科目群が整っている。観光関連の学科やコースは、文化学や社会学、経営学系の学部を設置されることが多いが、本学では、経済学部在り、この点が特徴的である。

前述の通り、観光は経済との結びつきが強い。観光産業は、需要の所得弾力性が大きく、景気変動の影響を受けやすい(奢侈的)と言われている。また、ホテルの料金や航空運賃を見れば分かるように、市場における需要と供給のバランスによって、価格は常に大きく変動している。また、最近では「観光公害」という言葉もよく耳にするようになった。観光客が増え過ぎてしまい(これは経済学で言う「超過需要」であり、近頃では「オーバー・ツーリズム」と呼ばれている)、地域住民の生活に支障が出ているという。これは、まさしく「外部不経済」であり、公共経済学の教えによると、何らかの課金が必要となる。

このように、観光を学ぶことで、経済学を学ぶことができ、逆に経済学を学ぶことで、観光も学ぶことができる。また、本学経済学部は国際経済学科を擁していることもあり、地域経済論や開発経済論、各国・地域の経済事情など、観光と広く関連する科目も豊富なため、多角的に観光を学習することもできる。

2020年には、東京オリンピック・パラリンピックが行われるが、先日、2025年に「大阪・関西万博」が開催されることが決定した。本格的な「大交流時代」の到来に向けて、経済学の観点から、観光という現象を正しく把握し、分析できる人財は、ますます求められる。したがって、観光市場で活躍できる人財を育成・輩出することは、本学経済学部の社会的使命の1つであろう。

# 10年後の自分を創造するために

デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 准教授 船曳 悦子

今回、「特集10年後の日本と世界、そして大産大」というテーマで執筆の機会を得た。10年後の自分を考えるときに頼りになるのは、10年前の自分である。着任7年目の私は、10年前には神戸にいたが、その後の神戸から岐阜、岐阜から大阪へ、2度の転職、2度の引越しなど、想像もしていなかった。しかし、常に考えていたことは、次の3つである。①自分を活かせる場に身をおくこと。②必要と言われるうちが華、その間に活躍する。③チャンスチャンスと判断できるアンテナを張り、それに見合う実力をつけておくこと。今まで転職が多かった私にとって、いつも不思議に思うのは、そろそろ慣れてきたな、私の役目も…と思ったころに、新天地への引きの話しが舞い込んでくる。そのような状況のため、たいていが忙しい日々である。一方、世間に目を向ければ、政府が提唱する「働き方改革」の一環でワークライフバランスが見直されるようになってきている。仕事とプライベートの生活はきっちり分けることや仕事8時間、プライベート8時間、睡眠8時間がベストなど。しかし、私にとって、仕事とプライベートの線引きが難しく、職場と自宅のシステム的な違いは、自宅には、+αとしてキッチン、ベッド、風呂があるというだけで、パソコンもあればプリンターもある。仕事をするには申し分ない環境が整っており、職場も自宅も仕事環境としては全く同じである。そのためOFFになるのは、ベッドにもぐりこむときだけである。このような状況であるため、ワークライフバランスといわれてもピンとこない。少し前になるが、落合陽一『超AI時代の生存戦略(2040年代)シンギュラリティに備える34のリスト』大和書房、2017を手にした。その中に「これからは、『ワーク"アズ"ライフ』を見つけれただけの生き残る時代だ」、「寝ている時間以外はすべて仕事でありその仕事が趣味である」、「仕事になる趣味を『3つ』持つ」とも書かれていた。賛否両論はあると思うが、私は、この考え方に共感できる。生活のバランスを考え、8時間を仕事の時間として切り売りしてお金を稼ぐより、自由に使える時間を手に入れると考える方が、私は幸せに感じる。趣味といえば、今までに見たことがない建物や風景を見ること(写真1、2、3)、大工道具を集めること、残り1

つはこれから見つけてみようと思う。

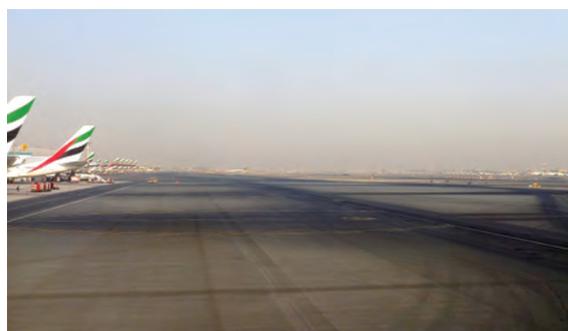
10年後はどのようになっているのだろうか。過去は振り返ることはできても、未来は想像するしかない。日々の努力で少しでも創造できるように心掛けたいと思う。



▲写真1 集合住宅建設中(ドバイ)



▲写真2 戸建て住宅建設中(ドバイ)



▲写真3 どこまでも続く尾翼(ドバイ)

# 自動車における「約束された10年」?

工学部 交通機械工学科 教授 田代 勉

これからの10年において、自動運転機能を有する自動車やEV(電気自動車)が普及していくことが、あたかも約束されているかのように語られている。一般に新たな技術や概念に基づくものが拡大し、それが主流になる場合、何らかの転換点を境に普及が急激に進むことが多い。自動運転やEVの転換点が今後10年以内にあるのか、身の回りにどのような形でどの程度入り込んでくるのか、どのような技術や手段が主流となるのか、その具体像を予想することは難しい。むしろ過去を振り返れば、「約束された10年」は予想するどころか「混沌とした10年」となるように感じている。

例えば地球温暖化が問題視され、CO<sub>2</sub>の排出量削減に対する要求が高まり始めた1990年代後半からの10年は、自動車でのCO<sub>2</sub>排出量削減の取り組みが進展することを約束されていたとも言える。私はその10年のうちの4年間、自動車部品メーカーにてドイツにある研究開発部門に赴任していたこともあり、欧州を中心に自動車関連企業や大学、研究機関等の考えや活動状況に生で触れる機会に恵まれていた。そこで目立っていたのはクリーンディーゼルの開発であり、欧州の有力な自動車メーカーは、燃料を噴射するインジェクタや燃料噴射圧力を管理する機構などに新しい技術を導入して、性能を格段に向上していた。日本ではガソリンの筒内直接噴射による希薄燃焼エンジン、いわゆる直噴エンジンの導入が目立っていたが、ディーゼルともども排気中の有害成分を十分に除去できず、時代の中核を担うものとはなりえなかった。その他に、水蒸気のみを排出する水素エンジンの開発を強力に進め、その効果や要素技術を各種イベントで積極的に発表していたドイツの自動車メーカーもあったが、2010年頃から一気にトーンダウンした。

一方、エンジンを効率よく使うために重い電池や電気モータを搭載することへの懐疑的な見方等から、当初芳しい評価はあまり聞えなかったハイブリッド車は、10年が経過した頃には、実は時代に合っているという見方が大勢を占め、各社が力を入れるようになっていた。この間、燃料電池自動車含めEVについても要素技術、電池、

インフラ、充電方法など様々な提案や活動がなされ、充電に時間がかかる欠点を補うために電池の仕様を標準化して、スタンドで電池を入れ替える方式を強力に推進したベンチャーもあった。これら以外に、業界内では本当に様々なアイデアが飛び交っていたことを思い出す。

しかしながら特に印象深かったのは、CO<sub>2</sub>排出量削減と本来関係ないと思われることや、複数の仮定を置いて論理展開しないと関係を説明できない、私にはこじつけとしか思えないアイデアがCO<sub>2</sub>排出量削減に絡めていくつも提案されていたことだ。今となっては具体的な内容を思い出すことはできないが、これらを推進している人たちと直接話すと、私の考えが浅いのか、彼らにこじつけの意識はなく、信念を持って取り組んでいたことに驚いた。同時に、金を精製することはできずとも化学薬品や実験器具など様々な形で現代の自然科学の礎となった中世の錬金術をイメージしたことも記憶している。

さて、これからの10年に話を戻すと、自動運転やEVに関連して混沌とするであろう状況は、教育に携わる立場にとって、非常に有用と感じている。例えば私が所属する学科では、1年前期の科目の授業8回分を用いて「EVの導入を即、積極的に促進すべきか」というお題に関するグループワークを実施している。ここでは自分の意志と関係なく、まず「促進すべき」という立場からそれを裏付ける情報を収集し、想像力を生かして更に考えを展開して発表、その後、逆の立場で同様なことを実施した後、他のグループの結果も踏まえて自らの考えをまとめる、というものである。発表では、EVの成立に必要とされている希少な資源の採掘現場での問題、新しいものが普及する時の社会現象、自動車に関わる産業構造を踏まえたものから、植物やペットに与える影響、EVになりエンジン音がしなくなると、車を疾走してストレスを発散している人ののはけ口がなくなって治安が悪くなる等々、一人一人がその志向や興味に基づいて様々なことを語り、まさに今後の混沌とした10年を想像させるものであった。同時に、学生達がこのような「約束」された10年間の「混沌」を活用して力を磨き、さらにその先の世界へ羽ばたいてほしいと切に願っている。

# 情報技術における10年後の世界

工学部 電子情報通信工学科 准教授 山崎 高弘

情報や通信の分野において、10年後の世界ではどのような技術が開発され、社会には何が受け入れられているでしょうか。情報技術の分野は非常に進化の早い世界です。次々と新しい技術やサービスが提供されています。10年後の未来を予測することは、なかなか難しいところです。

例えば、過去10年間で何が登場し、我々の生活に入り込んできたかを考えてみてください。現在、ほとんどの人が持つようになったスマートフォン、日本でiPhoneが発売されたのがほぼ10年前の2008年7月です。発売当初は普及について否定的な意見も多かったですが、スマートフォンの広がりには皆さんの知っての通りです。わずか10年間で完全に世界に受け入れられ、今では無くてはならないデバイスになっています。

また、日ごろ利用しているサービスについても、大きな変化がありました。ソーシャルネットワークサービス(SNS)の爆発的な広がりです。個人が情報を発信するツールとして、10年ほど前はブログが主流でした。TwitterとFacebookの日本語版がスタートしたのが2008年、LINEは2011年にサービスが開始されました。これらのサービスは若者だけでなく、多くの人が利用しています。

10年前には無かった機器やサービスが、現在では当たり前のように使われています。もちろん、鳴り物入りで発表されたものの期待されたほど受け入れられず、ひっそりと終了していたという例も数え切れないほど存在します。

10年後を予測するために、最近の情報技術における最もホットな話題を考えると、人工知能関連技術の発展がまずあげられます。将棋や囲碁のプロ棋士にコンピュータが勝利したことや自動車の自動運転についてのニュースについて、耳にしたことのある方は多いでしょう。スマートフォンには人工知能技術を利用した音声認識のシステムが入っていて、日頃から利用している人もいます。

人工知能(AI)という言葉が生まれたのは、50年以上昔の話です。何度かのブームと冬の時代を繰り返しながら進展してきたAI技術ですが、今回の第三次ブームは、今後

の世界を大きく変貌させると予測されています。これまでのブームと違うのは、研究者間のみではなく世間一般に受け入れられ、実生活で役立つレベルにまで進化している点です。

AI技術は人間が行っている知的な作業をコンピュータで実現する技術です。人間のように、言葉を理解したり、物事を判断したり、経験から学習したりすることができません。小説や映画に出てくるロボットをイメージするかもしれませんが、別に人型である必要はありません。そもそもAIとは、大量のデータを収集処理し、そこから自動的に特徴を抽出するなどして、人間の知的な活動を再現するソフトウェアにあたります。

10年後の世界では、人間に代わって様々なことを機械が行うようになっていくでしょう。車の自動運転、商品の管理、病気の診断、投資の判断、保険の審査などこれまで専門家が行ってきた仕事も機械に置き換えられていくと言われています。これをAIの脅威と感じる人もいます。半数近くの人の仕事が機械に奪われてしまい、人間の仕事がなくなってしまうという恐れです。さらに、2045年にはシンギュラリティ、すなわち人工知能の性能が人間全体を上回るという予測もあります。SF映画のように、機械に人間が支配されるかどうかはともかく、ある分野においては、AIの能力は人間を超えています。

単純な作業やルーチンワークなどは機械に任せて、これからの人間は個別の小さな判断ではなく、大局的観点からみた最終判断を下すことのできる能力が必要となるでしょう。また、創造性の必要な領域、人とのコミュニケーションが重要な領域も、引き続き人間が重要な役割を果たす分野でしょう。10年後の社会に対応できるように、技術の波に飲み込まれないように、目的意識を持って大学生生活を過ごしてください。

# 2018年は自然災害の多い年だった、 はたして10年後の未来は？

工学部 都市創造工学科 教授 水谷 夏樹

2018年は「自然災害」という意味で忘れられない年になりました。まず、6月18日に大阪北部高槻付近を震源とする大阪北部地震が発生し、最大震度6弱の揺れで5名の方が亡くなりました。特に小学校の塀が倒れて犠牲となった児童については、痛ましい事故として繰り返し報道がなされ、本学のすぐ隣にある野崎高校でもブロック塀がずれて長い間注意の張り紙が出されていました。

次に6月28日から7月8日にかけて西日本を中心に台風7号とそれに刺激された梅雨前線による凄まじい豪雨が続き、220名を超える犠牲者が出ました。特に岡山や広島では河川の氾濫や洪水、土砂災害が広範囲に発生し、数万戸を超える家屋の損壊が生じて、今なお生活再建の目処の立たない方がおられるとの報道がなされています。

また、9月4日には台風21号により、関空島で最大風速が58m/sを超え、およそ60年ぶりに大阪湾で高潮の記録が更新されたほか、猛烈な風に流されたタンカーが関空連絡橋に衝突し長期間に渡って橋が使えなくなるなど、大阪湾沿岸で浸水などの大きな被害が発生しました。

さらに台風21号の被害の全容が明らかになっていない中で、今度は9月6日に北海道胆振東部地震が発生し、最大震度7の揺れによって北海道胆振地方で極めて大規模な地滑りが発生するとともに、初めて全道が停電となる「ブラックアウト」と呼ばれる現象が生じました。これら一連の災害は、自然の驚異の前には人の力がいかに小さきことかと改めて考えさせられるものとなりました。

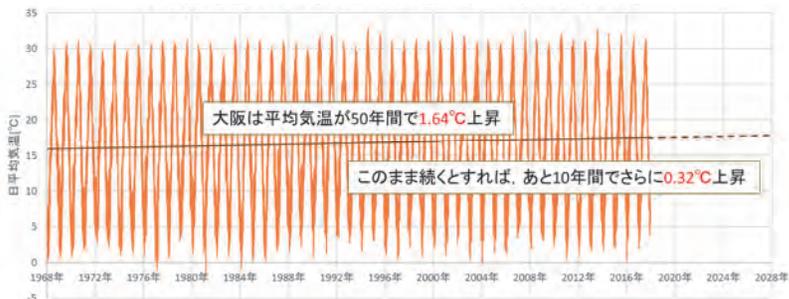
このように6月からテレビをつけるとほぼ毎日と言っていいほど災害の報道を目にする日々が続いていて、だんだん感覚が麻痺してくる感じがしています。特に台風と豪雨については確実に地球が温暖化していることから、今後も台風は巨大化し(この原稿を書いている10/24時点でも日本の南海上に「猛烈な」台風26号が発生しています)、梅雨前線の活発化により長雨、豪雨は頻発すると予想されています。私た

ちは、これからますます雨や風による自然災害に備えていかなければなりません。

ところで今年の夏は、「猛烈な暑さ」でもありました。夏が暑いと「温暖化している!」と思いたくなりますが、実際はどうなのでしょう?気象庁によれば日本の平均気温は、この100年間で1.19°C上昇しています。この間、世界では0.73°Cの上昇ですから日本は特に暑くなっているということになります。スペインからやってきたサッカーのイニエスタ選手も「日本は暑い」と言っていましたので、世界的にも暑い国になってしまったのかもしれない。

大阪はどうでしょうか?気象庁のデータから簡単なグラフを作ってみたら50年間で1.64°Cの上昇になりました。日本全体の平均気温よりもさらに上昇量が大きくなっています。大阪は大都市ですので温暖化だけが気温上昇の原因ではありませんが、このまま続くとすれば、あと10年でさらに0.32°C上昇することになる計算です。世界中の温暖化を研究している人たちは、1980～1999年の平均気温から2°C以内に気温上昇を抑えないと、地球は後戻りのできない変化が生じると警告しています。

7月28日の台風12号は東海地方に上陸した台風が、なんと近畿・中国・九州と西に向かって移動していきましました。また、平成28年の台風10号は、史上初めて東北地方に上陸しました。これらはいずれも過去の常識が通用しなくなってきていることを示しています。防災は「過去の常識にとらわれない」ことが身を守る最も基本的な考えです。今後も災害は必ず起こります。あなたとあなたの家族を守るためにも正しい知識を持って適切な対応力を身につけられるよう、これからも学んで下さい。



▲気象庁観測所(大阪)の50年間(1968-2017)の一日の平均気温の変化

# 大学教育の一環としての学生相談・支援の視点から、10年後を思う

学生相談室 嘱託カウンセラー／全学教育機構 非常勤講師 橋本 尚子

授業を終えると、そっと教卓に近寄る影。「質問かな？」と問うと、「うーん、先生、ちょっと聴いて欲しいことがあるんですけど……。」と学生。非常勤講師の出講時間内では対応できない相談の内容に、「この大学には、学生相談室があるから、そこで、じっくり話を聴いてもらおうといいよ。」と伝えながら、悩みを聴いて欲しい学生が結構いるなあ、学生相談室の利用者はきっと多いことだろうと思いを巡らせていたのが、今から20年前のことです。その6年後、授業で出講した日の半日を学生相談室の心理カウンセラーとして、相談業務にも携わるようになりました。本学の学生相談は、心理カウンセラーの資格を持つ非常勤講師のボランティアから始まったと聞いています。私の着任当初、予想外に、学生の利用が少ない状況を知りました。当時の瀬島学長の許可を得て、2,000人の学生を対象にした『学生相談室に関する意識調査－学生相談室の周知度と要望、及び、イメージの実態－』を行った結果、学生相談室の周知度は、2割に満たず、専任教員からは、「うちの大学に、学生相談室があったんですね。」という言葉が聞かれるほどでした。そのような存在だった学生相談室ですが、徐々に、利用者数も増え、教職員や保護者に対して、学生に対する指導や援助の方針を助言するコンサルテーションを行ったり、保健管理センターや学生生活課などの学内の他部署や学外の医療機関との連携体制も構築されていきました。また、相談以外にも、相談室を利用する学生の交流の場として、ティー・タイム『凡人の会』が、週1回開催され、卒業(離学を含む)の際の送別会なども、スタッフの自前で催されました。相談室は、学生の安らぎと憩いの場所としても利用され、スタッフの“手作りの相談室”という印象が、強いものでした。

平成20年に、『学生相談室規程』が制定され、独立予算が付くようになった頃には、室長を含めた心理カウンセラー5名(非常勤嘱託3名、兼任(教養部所属教員・人間環境学部所属教員)2名)が対応するようになりました。相談内容は、青年期特有の悩みごとの解決や、自我の確立・人格的成長を目指すものだけでなく、発達障害への支援を要するものが含まれるようになり、その割合は、

現在も増加の一途をたどっています。大学では、学生生活サポート連絡協議会が設置され、学部学科や事務部署との情報共有の機会が持たれるようになりましたし、教職員を対象にした研修会も、学生相談室が協力して実施されるようになりました。翌年には、発達障害やその疑いがある学生を支援するコーディネーター(契約職員1名)が配属され、学生が必要とする配慮を教員に伝えたり、学内外の各部署や機関との連携の方向づけを担うコーディネーションがなされるようになりました。学生相談室で、学生に対して、「学生相談」の他に、「学生支援」が本格的になされるようになったのは、この時からだと言えます。

こういった経緯のなかで、年々増加する発達障害学生への「合理的配慮」については、心理カウンセラーという立場からだけでなく、教員として、自らの授業での経験をお話することで、配慮願いを受けとられる教員に、より良く理解と協力を得ることができていると感じています。

それから、学生支援は、日々の修学の支援だけでなく、寝食を共にすることで各障害学生の特徴を深く知り、支援する際の貴重な情報を得る機会として、1泊2日のスキル・アップ合宿を行い、この行事は、現在まで毎年継続して実施されています。また、学生の主体性を養うために、学生の得意なものを活かして、学生自らが、仲間づくりの催し物を企画・実施するための支援をしたこともありました。

平成27年には、学生相談室を利用する学生(主に発達障害やそれを疑われる学生)の「居場所」として、コミュニケーション・ラウンジが設置されました。そこでは、コーディネーターが、前述の対応をするだけでなく、スタッフが交代で、週1回昼休み時間、及び、後期が始まる前の9月の3日間を使って、コミュニケーション・スキル充実のための学生研修を行い、学生支援の幅を広げています。

また、障害学生に対するノートテイク等の支援活動は、コーディネーターが統括し、支援を申し出た学生によって行われています。

さらに、学生相談室では、昨年、西口室長が中心となり、新入生を対象にしたアセスメントシートを実施し、

その情報を学部学科にフィードバックするという取り組みを進めています。

学業不振のため、退学を考えて相談に来る学生も多々あります。学業不振に陥りやすい傾向がみられる新入生の情報を、学部学科の教員が早期に得ることができれば、当該学生に対して、早期の指導や支援を行うことができ、結果として、留年や離学の減少に繋がっていくこととなります。

この学生相談室と学部学科の連携の取り組みが、今後も継続されることにより、学生の修学支援の一層の充実がなされていくことと思います。卒業後の進路についても、若者サポートセンターの他、特に、発達障害学生を対象とした就労移行支援施設や、大阪府の支援関連の事業者などと情報交換を行い、学生に紹介し利用を促しています。連携に関する新規の開拓についても、各スタッフが情報を広く集める努力を怠っていないのが現状です。

さて、今から10年後の学生相談・支援のあり方を考えると、障害者差別解消法の施行に伴い、現在は、努力義務となっている私立大学での障害学生への「合理的配慮の提供」が、今後、法的に義務化されていくでしょうから、支援体制の充実を図るために、現在、学生相談室が抱えている課題を迅速に解決していくことが求められることになるでしょう。まず、学生相談は、守秘義務はもちろんのこと、場合によっては、生死と向き合う過度な負担と責任を伴う業務ですから、本学と同規模、或いは、それ以下の他大学の多くでは、日本学生相談学会(本学は機関会員)が発行している『学生相談機関ガイドライン』に基づき、室長はもちろんのこと、学会認定の大学カウンセラー(高等教育機関の学生相談専門のカウンセラー資格・教員であることが望ましいとされている)や、その他の様々な背景をもつ心理カウンセラーが、専任の専門職として権限を保障され活動しています。コーディネーターについても、同様に考えることが望ましいでしょうし、増加し続ける発達障害学生への対応には、コーディネーターの増員が必要です。また、ガイドラインでは、学生相談機関には、専門的活動を支える事務部門があり、受付や必要な事務

業務を行う職員が配置され、その高等教育機関の事務分掌の中に位置づけられていることが必要であるとされています。本学では、コミュニケーション・ラウンジに、1名(パート事務職員)配属されています。いずれにしても、学生を支える機関に属する者の足元が揺らぐような体制では、支えを必要とする者を支えきることはできませんから、本学も、ガイドラインが示すような体制をとることが望まれます。また、現在は、2か所に分かれている学生相談室(12号館5階)と、コミュニケーション・ラウンジ(ランゲージ・カフェの2階)の施設(相談窓口)は、1か所に集約されることで、より機能的な連携がなされるでしょうし、保健管理センターとの連携も考えると、両施設が物理的にも近いとより良いでしょう。さらに、学生相談室は、悩みを抱える学生のためだけではなく、すべての学生を対象に、ストレス・マネージメントなどの心理教育を行う予防的な対応、また、発達障害だけでなく、さまざまな障害について、理解を促し、日常生活の中で、自然に支援の手を差し伸べることのできる学生を育てることも必要だと思えます。そのような目的で行う授業や、学生の交流の場ができればよいと思います。そして、学部学科では、教職員による日頃の指導や支援を通じての、すべての学生を対象とした予防的な対応(日頃の声掛けによる学部学科での「居場所」づくりなど)も、より一層なされるようになっていけば、「チーム・オール大学」による、学生ファーストの大学として、学生が、生き活きと学生生活を営むことができ、大学に誇りと愛着を持って、社会に旅立っていただけるでしょう。

ちょうど様々な楽器が、それぞれのパートを担って、人のこころを魅了する美しい曲を奏でるオーケストラのように、教職員・カウンセラー・コーディネーター、さらに、学生によるピア・サポーターなどの立場や役割を異にする者が、それぞれの特性を十分に活かし、学生の支援を行うといった全学的な学生支援体制の充実に、学生相談室が支えとなっている。そのような学生相談・支援のあり方が、実現されていることを夢見ています。



の国民は日本人や日本の社会とは異なり、日常生活や文化として、自分を殺して公(隣人や社会人類)のために自己利益を犠牲にする精神があり、しかも自発的に行われていると語っているからである。

瀬島源三郎は、『大阪交通学園創立四十周年誌』の回想録の中で、大阪交通学園の創立の主旨に関して次のように語っている。

従来の教育のごとく、出世のための手段としてではなく、そういう功利を離れた教育の場をつくるということが、国全体の文化向上への大前提であると考えたのが、本学園創立の主旨であり、従って人間各自の使命を完全に果し、それが生を受けた人間の生き甲斐であるという教育のあり方を、私は考えた。偉人になるとか、学者になるとか、名誉や地位の高い人間になるとか、金持ちになるとか等の、小乗的な功利主義的な考えを捨てて、いざとなれば、おのれを殺して人間社会に貢献する、それが自分の生き甲斐であり、そして、それが同時に平和で幸福な生活に繋がり、従って長い人生への生の喜びであるというような考え方を持って、平凡なようだが、かくなくてはならない人間社会構成への最もよき分子になる教育を私は考えた。これこそ、私の考えた人生において最も偉大なものであると……(『大阪交通学園創立四十周年誌』1968: 344)。

#### IV 「不有」と「偉大なる平凡人」に関する理解

瀬島源三郎は自叙伝である『不有の記』(1962)の「著者のことば」および『学校法人大阪産業大学五十年史』(1980)の中で、老子の教えである「萬物作焉而不辞、生而不有、爲而不恃、功成而不居、不惟不居、是以不去」(万物を作って自己のものとしな、またそれを成し遂げても恃みにしない、功なってもそこにおらない、それが故に永久に去らないという不有の教訓を心の左右において離さないようにしている。だから私自身の手にあるものは一物もない代わり、また奪われるものはないのだ)(天下皆知章第二)中の「不有」を自分の雅号としたと語っている。この「不有」をより理解するためには、瀬島源三郎の人生観に何よりも大きな影響を与えた瀬島源三郎の故郷岡山県真庭郡にある川東村の小松哲一郎翁を理解しな

ければならない。当時村長であった小松翁は、他人に比べて優れた才能をもち、かなりの財産を親から受け継がれたので、家柄と財産に恵まれた人であった。ところが、クリスチャンであった小松翁は優れた家柄や地位や才能や財産を自分のために、自分の家族や自分の派閥のために、あるいは投機事業や遊興のために使ったのではなく、人々や社会のために社会事業や他人の救済のために一生を過ごし、偉大なる影響を与えてきた「偉大なる平凡人」の模範を示したわけである。

瀬島源三郎は天城中学校に通っていた頃、この小松翁と対話しながら、大きな感銘と教訓を受けたことに関して次のように述べている。

小松翁はよくこんなことを私にいった。「源さん富士山ネエ」「ハアツ」……私は小松翁がなにをいい出すのか、とっさに判断がつかなかったのだ。「あの山の頂上に住みたいかい、それともふもとがいいかい」「……………」私はなんと答えるべきか返事に困った。富士を憧れて登山するものはふもとを見に行くものはない。頂上を征服する満悦に酔うためではなくてなんであろう。「そりゃ頂上と違いますか」……と答えると「そうだろう。その通りみんなが頂上をねらっているんだヨ、ところがあそこはせまいのだ。そのせまいところに人間がひしめき合う、それでは住みにくいヨ、それよりもふもとにいることだ。頂上にいて多くの人から見上げられるような人間、そして自分が人を下にみる頂上の生活は決してほかのものがみるほどいいものではないはずだ」とこういう。寸尺の土地を争って他の競争者を押しつけ、つき落とす生存の浅間しき戦いで無垢であった心に憎悪と哀感という人間苦で汚れているありきたりな世間に対する小松さんらしい警句なのである(瀬島源三郎『不有の記』1962、15-16)。

ところが、瀬島源三郎は、いつのまにか小松翁の遺訓にそむき、「学校を出ると上京し、人と人の生存の修羅の場で立身という頂上を求めてしのぎを削るようになった」と自分を恥ずかしく思うようになった。よって、瀬島源三郎は、故郷岡山県にある小松翁の墓前に額づき、自分は何よりさきに「こんごは偉大なる平凡人で終わろう」と誓っ

たのである(瀬島源三郎『不有の記』1962、17)。

このような経緯があったので、瀬島源三郎は1971年(昭和46年)7月に、学校法人大阪交通学園理事長を辞任した後、理事長を自分の息子に譲らず、1971年(昭和46年)7月から1972年(昭和47年)3月までは大谷貴義に、1972年(昭和47年)5月から1978年(昭和53年)5月までは長藤友三郎に理事長を任せたのである。これこそ、瀬島源三郎の雅号「不有」の精神であり、彼自身が建学の精神である「偉大なる平凡人」の模範を示したと考えられる。

## V リーダーシップのあり方

### 1 リーダーシップとリーダーの定義

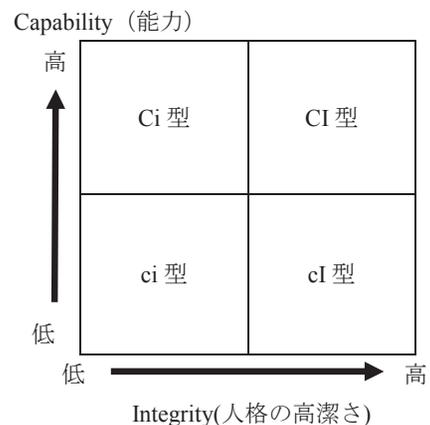
本稿では、環境変化や状況によって変わるリーダーの行動(Doing)ではなく、望ましいリーダーシップのあり方(Being)に関して論じたい。リーダーシップとは支配力ではなく「影響力」であると言える。リーダーシップが問題や目的設定と、その目的を達成する手段やプロセスにおいて、ただ合理的であり、効率的であればよいわけでもない。よって、リーダーシップには目的達成する能力(Capability)ばかりではなく、人格の高潔さ(Integrity)をも含まれる。本人の意図があろうとなかろうと、職責や地位や家柄などとは関係なく誰でも人類社会や自然界に影響を与えているのは確かであるので、我々は平凡人であるが誰でもリーダーであることを否認することはできない。

### 2 リーダーシップのあり方のCIモデル

人間は誰もが人々からなる社会ばかりではなく、自然界にも影響を与えるので、誰でもリーダーシップを発揮すべき責任がある。問題になるのはいかなる影響を与えるリーダーなのかである。昨今の出入国審査の自動化、シャトル電車の自動運転などIoT、ビッグデータ、AI、RPA等の新しい技術による第四次産業革命時代におけるヒトは、一人ひとりが自分の専門分野における意思決定をせざるを得ないし、それが企業および社会に大きな影響を与えるようになった。悪い狙いやたくらみを持っている人々がこれらの技術を悪用するか、あるいは人類社

会のために貢献したい人々がこれらの技術を善用するかによって、その結果が人類社会にもたらす影響力は両極を走る。したがって、今の時代で問われるのは、リーダーシップのあり方である。

本稿では、リーダーシップとは人類社会に影響を行使するための能力(C: Capability)と人格の高潔さ(I: Integrity)の高低によって、リーダーシップのあり方のCIモデルを提案したい。まず、人格の高潔さの高低によって悪いリーダー(Bad Leader)と偉大なリーダー(Great Leader)として分類したい。<sup>2</sup> さらに、悪いリーダーを非倫理的かつ能力もないリーダー(ci型)と目標を達成する能力は高いが自己中心的で自分の腹だけを肥やす邪悪なリーダー(Ci型)としてタイプづけ、また、偉大なリーダーを組織の目標を達成する能力は平凡だが人格の高潔さを保っているリーダー(cI型)と組織の目標を達成する能力も、人格の高潔さと人々や社会に貢献したい情熱をも持っているリーダー(CI型)として分類したい。



悪いリーダーは、自己中心的で自分の腹だけを肥やすために相手を虐待・搾取したり、仲間を踏みつけたり、仲間の手柄を横取りしたり、自己本位な振る舞いをわざとし、結果的に人や社会や自然界を萎えさせる影響を与えるリーダーである。偉大なリーダーは自然界と社会に偉

2 ヒトは誰でもリーダーであるし、リーダーシップを発揮する責任がある。リーダーの基本的な使命は組織の目標を達成することなので、凡人並みに影響を与えながら組織の目標を達成するリーダーは良いリーダー(Good Leader)だといえる。

大な影響力を与えるリーダーである。偉大なリーダーは、社会倫理に反することをしないことにとどまらず、自己利益に走らず、その人がいるだけで周りが豊かになり、たとえ自分自身には損になっても、犠牲になっても、人に、社会に悪い影響をあえて与えない、さらに人のために、社会のために、全世界のために仕え、貢献する人々である。

私たちの身の回り、馴染んでいるcI型リーダー（偉大な平凡人）は、母親と父親であるといえる。生まれたばかりの赤ちゃんにとっていかなる偉人や社長や大統領や権力者よりも偉大なリーダーは自分の母親と父親である。母親と父親は自分の子供に偉大な影響を与えるにも関わらず、自己利益に走らず、子供のために自己犠牲しながらも食べさせ、飲ませ、洗わせ、着かえさせ、教育させるのに全力を尽くして支えて、仕える。子供達は、親の自己犠牲によってより高い自我と自尊心と大きな夢とビジョンをもって未来に向かって飛翔することができる。

瀬島源三郎が大阪交通学園の創立の主旨として語っている「偉人になるとか、学者になるとか、名誉や地位の高い人間になるとか、金持ちになるとか等の、小乗的な功利主義的な考えを捨てて、いざとなれば、おのれを殺して人間社会に貢献する…（中略）…平凡なようだが、かくなくてはならない人間社会構成への最もよき分子」（『大阪交通学園創立四十周年誌』1968: 344）を筆者のリーダーシップのあり方のCIモデルに照らして見るとcI型に近い。ところが、1980年に発行された『学校法人大阪産業大学五十年史』の中にある建学の精神である「偉大な平凡人たれ」は、「深い人生観と広い世界観を養うとともに、新しい産業社会の発展と人類の福祉に寄与できる、世界的視野に立つ近代的産業人の育成にたゆまざる情熱を傾け、日進月歩の社会発展に対応できる学府として棋界に貢献する」ことは、リーダーシップのあり方モデルのcI型から、さらにCI型を目指す大阪産業大学の教育理念であるといえる。

## VI 結論

大阪産業大学の建学の精神である「偉大な平凡人たれ」を理解するためには、「偉大さ」と「平凡人」という概念の融合の妥当性、ヒトは誰でも人類社会に影響を与える

リーダーシップの責任があり、リーダーシップとは影響を与える能力と人格の高潔さからなることを理解する必要がある。リーダーシップのあり方で問われるのは、目標を達成するための能力ばかりではなく、いかなる影響を与えるリーダーなのかである。

「偉大なる平凡人たれ」の英文である「Greatness for the Masses」が雄弁に物語っているのは、一般的にいわれる偉人とか、英雄とか、金持ちとか、聖人とかではなく、自己中心的に自分や自分の派閥の腹だけを肥やすのをやめ、少しは損になっても、自己犠牲になっても、「多くの人々」(the Masses)のために、人類社会や自然界のために貢献する「偉大さ」(Greatness)である。よって、偉大なる平凡人とは、社長とか、取締役とか、部長とかの職責や地位や家柄などに問わず、誰もが人々や社会や自然に偉大な影響を与える普通の人々をいう。偉大なる平凡人になる第一歩は、自己利益だけを求め、人々や自然界に悪い影響を与える悪いリーダーにならないことである。偉大なる平凡人になる次なるステップは、自分自身がどんな地位にあるうが、人々や社会や自然界に影響を与えるリーダーシップの責任を負っていることを認識し、模範を示すことである。そして、偉大なる平凡人になる第三のステップは、何をしてもどこにいても「人格の高潔さ」を守ることである。従って、偉大なるリーダーシップの真髄は優れた人格であるといえる。完全な人間はいるわけではないが、リーダーが行うすべてにおいて、何をしても、どこにいても、すべてが真実で、すべてが正しいし、すべてが称賛に値することを行う人格がある人々が「偉大なる平凡人」なのである。

また、偉大なるリーダーシップは知識だけではなく実践が伴わなければならない。相手にやってもらうより、自分自身から仕える模範を示し、信頼されることが大事である。明日からではなく、今日、この瞬間から始まる実践が大事である。このような文脈から大阪産業大学の建学の精神である「偉大なる平凡人たれ」を再解釈すると、まさに社会や自然界に偉大な影響力を与える夢とビジョンを持って未来に向けて飛翔する偉大なリーダーを育成する学校法人大阪産業大学の教育理念であるといえる。



▲平成30年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)努力賞作品  
『Beauty of Modernization』  
SINGHAVONG LOUANGSADED(工学部 電子情報通信工学科)

# 学園創立90周年記念イベント

学園創立90周年記念イベント

Events Commemorating the 90<sup>th</sup> Anniversary



上：青柳美扇氏による書道パフォーマンスより  
下：学生自治会によるイルミネーション企画より

# 青柳美扇氏による書道パフォーマンスを見て

工学部 機械工学科 吉田 彩乃

私は今回、青柳美扇さんの書道パフォーマンスのお手伝いをさせていただき、パフォーマンスも拝見させていただきました。お会いすると私がイメージしていた書道家のイメージとは違い、綺麗で優しそうな印象を受けました。

パフォーマンスの時、舞台袖から登場すると、用紙が張られた台の前に立ち、何も持たずに手を使って文字の大きさや配置をイメージなさっているようでした。そして、ダダンッという音楽とともに身体全体を使って字を書き始めました。会場にいる皆さんも私も、何の字を書くのだろうと緊張感やワクワクした気持ちでステージを見ていました。

字には、一画一画に力が込められており美扇さんの強い思いが表現されているように感じました。今回書かれた「夢」という字はとても力強く、最後の一筆には未来を感じました。書き始めと書き終わりが音楽とピッタリ合っていて書くスピードもかなり練習されているのだなと思いました。写真のみ可となっていたこともあり、書き終わるとほぼ全員がスマートフォンを取り出し写真を撮っていました。最初は撮るつもりがなかった人も感動し、撮っておこうと心が動かされたのではないかと思います。会場の一番後ろから見ていて、皆さんが写真を撮るために挙げたスマートフォンの数の多さにビックリしました。最近は公演が多く時間がつくれないうち、それでも一日何百枚と練習されているようで尊敬しました。海外でも公演なさることも多いそうで、言葉が通じないからこそ作品を通じて思いを伝えるそうです。漢字を使わない外国で線の強弱や字の大きさ、気持ちで思いを伝えるのは難しいと思うので本当

にすこいなと思いました。

30分ほどのトークショーでは美扇さんの幼少期どんな子どもだったのか、綺麗な文字を書くコツを教えてくださいました。漢字は大きく、ひらがなは少し小さく、字が中心線を通るように意識して書くと綺麗な字が書けるそうです。字の癖はすぐに直るものではないので、今から意識して直したいと思いました。そして就職活動で履歴書を出すときに綺麗な字が書けるようになってほしいです。

その後、2作品目を書いてくださいました。「阪駒祭」という学祭名なので思いを込めて書くのは難しかったと思いますが、字からは力強さを感じてよかったです。

1作品目は布地の用紙に書いていらっしやっただけで筆がはしらず、とても書きにくかったと思います。2作品目は一見普通の半紙のように見えたのですが、よく見ると襷に書かれていて驚きました。私は今回初めて生で書道パフォーマンスを見ましたが、普通の書道とは全く別物なのだと思います。出来上がった作品だけを観客に見せるのではなく、書いている姿も含めての書道パフォーマンスで、用紙も私たちが驚くような書きにくいもので思いを届けるためにたくさんの工夫をなさっているのだと思いました。一回パフォーマンスをすると墨汁が服に飛び散ります。衣装はどうなさっているのですか?と尋ねると一回限りで終わりだそうです。とてももったいなく感じましたが、舞台袖から墨汁まみれでドロドロの衣装を着て登場したところを想像すると、やはり綺麗な衣装を着てほしいと思ってしまいました。

今回、美扇さんの書道パフォーマンスを見て私も何か



頑張れることを見つけたいと思いました。高校生の頃は部活を頑張っていると胸を張って言えたのですが、今はそんなものが無くただ何となく一日が終わっていつてしまっているように感じます。毎日忙しい中でも今の自分に満足せず、成長しようとしている美扇さんのようになれるようにまずは小さなことから頑張っていきたいと思います。



# 学園創立90周年記念 学生企画を終えて

学生自治会執行委員会 企画担当 喜入 輝

この度、大阪産業大学学園創立90周年を記念して、我々学生自治会執行委員会とOSUエルダープロジェクトで学生企画を行いました。その学生企画について、実行するまでの過程と企画の詳細、報告をさせていただきます。

昨年度、卒業生である前学生自治会会長の「創立90周年を祝う企画を実現して成功させてほしい」という強い想いを引き継いで、私が企画を進めていきたいと考えていました。その時、OSUエルダープロジェクトのある方から「自治会とエルダープロジェクトでコラボ企画をしたい!」と、お声を掛けて頂きました。その結果、学生自治会執行委員会とOSUエルダープロジェクト共催で本企画を実行することとなりました。

本企画は本学学生約8000人全員で盛り上げ、学園創立90周年をお祝いすることを目的としており、少しでも多くの学生に90周年であることを知ってもらえるような企画を考える必要がありました。幾度の会議を行い、本企画としてスタンプラリーとイルミネーションを行うことが決まりました。

スタンプラリーは学内の様々な施設を巡って、普段あまり接点の無い施設や場所で新たな発見ができるようなものにしました。参加者全員に記念品のメモ帳を配り、後日当選者発表を行って当選者に豪華景品をお渡ししました。2週間、期間を設け参加者は168名と、沢山の方に参加して頂くこととなりました。

イルミネーションは中庭、本館前、バス停付近の三カ所に電飾を設置し点灯しました。

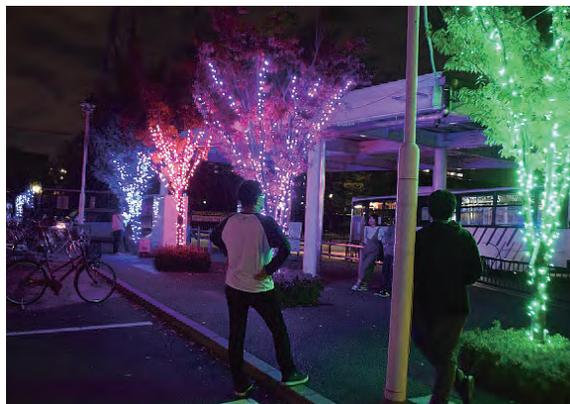


▲スタンプラリー 当選者発表の様子

第53回阪駒祭でイルミネーション点灯式を行い、沢山の来場者に見ていただきました。学生からも評判は良く、キャンパスを歩いていると「イルミネーション綺麗～」などの言葉がよく耳に入ってくるがありました。SNS連動企画として、Twitterでハッシュタグを付けてイルミネーションの写真を投稿すると、抽選で景品が当たる企画も同時に行っていました。



▲イルミネーション 本館前の様子



▲イルミネーション バス停付近の様子

本企画が創立90周年の企画に相応しく、10年後の創立100周年への大きな第一歩になったと実感しております。100周年ではより一層大学全体で盛り上げられるよう、今後も後輩の指導と楽しい企画の考案・実施に努めていきたいと思っております。

最後に、約1年間を通して一緒に立案から実行までを成し遂げて下さった企画メンバー、そして本企画において

様々な御支援や御援助、御協力頂きました協賛団体である学校法人大阪産業大学と大阪産業大学学会に心から感謝申し上げます。



▲イルミネーション 中庭の様子



▲点灯式 カウントダウンの様子

(工学部 電子情報通信工学科)

# 新たな鉄道への一歩

OSU鉄道プロジェクト代表 森田 和真

## 1. はじめに

私達のプロジェクトは、大阪産業大学の前身である大阪鉄道学校が今年で創立90周年ということで、原点に帰りもう一度鉄道について詳しく学ぶことをテーマに始動しました。

活動内容としては線路幅127mm(5インチゲージ)を使い、現実とほぼ同じ信号システムや車両制御などの製作を行っています。最終目標として鉄道技術の向上とキャンパス内を移動する負担の低減のためにキャンパス構内に軽便鉄道を引くことを目指しています。実際、キャンパス内の移動は学部によっては移動距離が異なり、取る単位によっては受ける教室までの距離がかなり長いことがあります。そのため、状況によっては講義に間に合わなくなり、遅刻扱いにされることもあります。また無事講義を受けられても教室移動の疲れにより授業に集中できない事もあります。その問題を解決するためにキャンパス内に鉄道を引いて、少しでもその負担を低減したいと思います。

## 2. 車両製作について

まず初めに、鉄道部門のメンバーで乗用客車のデザイン案を出し合い、出た案を元にプロジェクトメンバー全員でアンケートを行い、決定したデザイン案を元に設計図を製作しました。その際、初の車両製作であることを考慮して、複雑な構造にせずできるだけ簡素で質素な形にし、整備のしやすさや持ち運びやすさを重視した上で設計図を製作いたしました。



▲今回完成した乗用車両

次に車体の製作を開始しました。初めは骨組を作り、それと平行して屋根の製作も行いました。その後に床板の加工を行いました。今回は車両搬送時の負担低減のため、骨組と床板は溶接せず上に載せるだけにしました。そして側板の穴あけを行いました。側板はボルト止め方式にして、デザインを交換できるようにしました。最後に作った乗用車両にデザインを施しました。今回は時間がなかったため、帯や窓は塗料を使わずにテープを使用しました。またステンレスを多く使用しているため、ステンレス要素を多く残し、帯と窓を付ける程度にして、質素で目立つデザインにしました。屋根にはヘッドライトを取り付け、前面と後面には行き先を記入するための小さな黒板を付けました。

最後に走行機器やバッテリーを車両に載せ、試運転を行いました。試験走行では目立った不具合はなく、快調に走行しました。今回はかなり切羽詰って作業を行った上、技術が未熟の方が多く占めていたため、無事に完成できると心配していましたが、無事に何事も無く完成できてよかったですと思いました。

## 3. 学祭の様子

そして学祭当日、私達は本館4階にて製作した乗用車両とその車両の製作過程やプロジェクト紹介を記載したパネルの展示と、製作した乗用車両の試走を行いました。今回は場所の関係により1周に線路を敷くことができず、U字型で敷き、往復運転を行いました。また今回は安全のため、車両に人を乗せて走らせることを一切禁止にしました。

今回、見学に来られた方は家族連れや大人連れ、OBの方などを含めて約30名でした。その中には驚く人から誉める人もいたり、子連れの家族であればはしゃぐ子もいました。今回、作ったデザインに満足していただけるか少し心配ではありましたが、多くの見学者の方々に満足してもらえて良かったです。

特に子供からは「カッコいい」という声が出たとき、私は内心うれしかったのと同時に安心しました。今回来てく



▲学祭当日の展示風景

れた子が見学会をきっかけに鉄道の事をより深く好きになって欲しいと思いました。そして最後は無事に大きなトラブルも起きずに学祭を終えることができました。

#### 4. 最後に

今回、乗用電車の作成に協力してもらった大津山研究室の皆様および製作においてのアドバイスを与えてくれた企業や大学生徒の皆様、予算を出してもらった大阪産業大学学会、そして短期間で共に車両を製作してもらったプロジェクトメンバーに改めてもう一度深く御礼と感謝を申し上げます。

(工学部 交通機械工学科)

# 関西フィルハーモニー管弦楽団クリスマスコンサート

デザイン工学部 情報システム学科 吉向 宏恵

12月4日に関西フィルハーモニー管弦楽団のクリスマスコンサートのアルバイトとして参加しました。

お昼過ぎから、ポスター貼りや椅子の掃除、受付の準備、受付に置くパンフレットの準備をしました。準備中続々と出演者の方が会場に到着され、控室に向かわれる方、会場で楽器の調整を行う方と出演者一人一人リハーサルまでの過ごし方が違いました。15時からリハーサルが行われました。私は別の所で作業をしていたこともあり、リハーサルは見る事ができず、本番までお預け状態になりました。開場時間30分くらい前から少しずつお客様がお越しになりました。私は受付にてお客様のお迎えをしていました。お客様は小さいお子様からご年配の方まで幅広かったです。



開演時間になると同時に私も中に入り、鑑賞させて頂きました。久しぶりにオーケストラの演奏を聴き、とても迫力があって鳥肌が立ちました。やはり生で聞く音楽は素晴らしいと感じました。途中、指揮者体験コーナーがありました。3名のお客様が実際に指揮台に立ちました。お客様一人一人違った個性があり、また指揮者がどれほど凄いかがわかりました。ただ棒を振っているように見える指揮者ですが、実際はとても大きな役目を果たしているのです。



演奏会は1時間ほどで終了しましたが、アンコールではクリスマスメドレーとして「赤鼻のトナカイ」「ホワイトクリスマス」「サンタが街にやってくる」の3曲を演奏していただき、皆さんとても楽しげに聴き入っておられました。

終演後、お客様をお見送りしましたが、どのお客様も笑顔で楽しそうでした。沢山のお客様が満足して下さったことを実感しました。1時間という短い間でしたが、音楽に実際に触れることにより、心が穏やかになり、多くのお客様と同じように笑顔が溢れるようなコンサートでした。日常を忘れて音楽に浸る時間もいいと思いました。



---

---

# 学会主催見学会

---

---



学会主催見学会

Tours Sponsored by the Academic Society

# 和菓子作り体験会に参加して

小藪 竜也

私は夏休みに初めて学会主催の和菓子作り体験会に参加しました。

滋賀県にある叶 匠壽庵の和菓子職人の指導のもと、和菓子作り体験を行いました。

最初に日本家屋の雰囲気漂う建物に案内され、叶 匠壽庵でつくられた和菓子を試食しました。今回試食したのは、「あも」という小豆でお餅を包んだ和菓子です。私自身、今回初めて食べました。食べてみると中にはもちもちとした白いお餅、熱いお茶に合う美味しさでした。お話をお伺いすると、季節により味が変わるそうです。

お昼もお弁当箱の中には和の雰囲気溢れる色鮮やかな料理が並んでおりあっさりとした味でとても美味しかったです。普段はこってりとしたものに慣れているからか、いつもと違う感じがしましたが、日本食の良さを改めて実感することができました。

午後から和菓子作り体験会が始まり、叶 匠壽庵の和菓子職人の指導のもと、夏をイメージした和菓子の一つ一つを作りました。職人の方はいとも簡単に作られていましたが、いざやってみるとこれがなかなか難しく、思うように生地がつかなくなったりしましたが、隣同士教え合いながら一つ一つ作っていきました。

私自身、完成に近づけば近づくほどに気分が盛り上がり、4つ全て完成したときには日本の和菓子の繊細さを実感しました。

その後は和室の通されお抹茶をいただきました。私は抹茶の味のするものは食べたことはあるのですが、お抹茶を飲むのは初めてでした。飲んでみると、お茶にありがちな渋みは一切なく、美味しくいただくことができました。

そしてお土産を購入し叶 匠壽庵を後にし、ラ コリーナ近江八幡へと向かいました。

ラ コリーナ近江八幡は自然に囲まれた小規模なショッピングセンターのような施設でした。周りが自然に囲まれているからか、空気が澄んでいて散策しているだけでも風が気持ちよかったのをとてもよく覚えています。

敷地内にはたんぼもあり、成熟した稲穂も見ることがで

きました。

散策をしたのちにラ コリーナ近江八幡を後にし、無事その日の見学会を終えました。

日本文化に触れる機会があまりない昨今、今回このような体験会に参加して、日本の食や文化についてより深く知り、たくさん触れることができました。

「和菓子って普段からよく食べるけれどどのように作られているんだろう」といった疑問を解決でき、「地域に根付く名産品の和菓子があるならばもっと知りたい」と思うようになりました。

短い時間ではありましたが、本当に貴重な体験をすることができました。このような体験会を企画された学会の方々をはじめ、叶 匠壽庵の皆様、そして教授の皆様、今回一緒に参加した方々へ改めて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。



(デザイン工学部 情報システム学科)

# 羽田機体工場見学会

塚田 耀大

私は、昨年に続き二回目の羽田機体工場見学に参加させていただきました。一年目はANAコース、二年目はJALコースに参加しました。どちらの見学もとても感動的でした。一年目の見学の時は船での羽田空港沖のクルージングはとても印象に残っています。今までこのような見学をしたことがなく、また、あんなに近くで飛行機が離着陸するところが見られるのはとても迫力のある光景だと思います。私は、一眼レフカメラを構え撮影をする事にとっても心が躍りました。すぐそこから、聞こえてくるジェット機の迫力あるエンジン音は最高でした。何よりも、やはり国際空港ならではの外国の飛行機をたくさん見られるのも魅力でした。数年前に日本の航空会社から姿を消した「ジャンボジェット」をあんなに近くで見られるのも魅力の一つだと思います。そして、見学が終わりホテルに荷物を置くと秋葉原に行きました。この時は、横浜に住んでいる兄と待ち合わせをし、夕食を食べてぶらぶらと秋葉原を観光しました。久しぶりに兄との時間を持てたのも楽しいひと時となり、あっという間の一日が終わりました。二日目、私は空港探索を終え、ANAの機体工場に行きました。今でもこの時のことははっきりと覚えています。博物館のような入り口を入ると飛行機の模型やコックピットの一部などが飾ってある場所がありました。しばらくすると、ANAの制服を着た女性の職員の方に案内され、ドラマ「GOOD LUCK!!」のテーマ曲と共に教室のようなところに行きました。そこでは、飛行機に関するクイズをしました。それが終わるといよいよ工場の見学です。職員の方に案内され、移動しました。すると、目の前に大きな飛行機の機体が現れました。確か、ボーイング787型機だったと記憶しています。普段、空を飛んでいる飛行機は小さく見えるのに対しこの時はとても巨大な乗り物なんだなと思いました。そ



して、整備されているジェットエンジンを機体から外されている状態で見るのも初めてだったので、エンジンの中身まで見る事ができました。そんな感動と共に二日間の見学はあっという間に終わりを迎えました。そして、今年もう一度あの見学会に参加したいと思い参加させていただきました。今年はJALコースに参加しました。二年目ということで、また、船に乗って羽田空港沖に行けるのを楽しみにしていました。一年目のときは雨でしたが、今年は雨にあうこともなく曇ってはいましたが、とても撮影がしやすかったです。昨年と同じように近くで見る飛行機はとても迫力がありました。今年は望遠レンズを持参したので、離着陸だけでなく遠くから羽田に着陸しようとしている飛行機も撮影できました。あっという間のクルージングが終わると、ホテルに戻り友人と一年ぶりの秋葉原に行きました。今年は兄と予定があわなかったため急遽友人をこの見学会に誘いました。そして、秋葉原の観光が終わり帰道を少し遠回りし電車で東京の町を一望しました。夜景がとてもきれいでした。あっという間の一日が終わり二日目を迎えました。今年はJALコースでしたので、JALのSKY MUSEUMというところに行きました。そこは、JALの歴代の制服や飛行機の模型が飾ってありました。博物館内の見学が終わるといよいよ工場内見学です。今年は政府専用機が見れると事前に聞いていたので、とても楽しみにしていました。工場の中に入ると大きな飛行機が見えてきました。やはり、この感動はこの見学会ならではの魅力です。しばらくすると、外に政府専用機が見えました。もうすぐ、政府専用機は新しい機体になるそうなので最後に見ることができてよかったです。二年連続この見学会に参加させていただきましたが、航空業界に興味を持っている私にとって本当に楽しい見学会だったと思います。また、来年も参加したいと思っています。



(国際学部 国際学科)

# 4度目で最後の鈴鹿安全運転研修

市村 恵大

私は大学生最後の夏休みに学会主催の鈴鹿安全運転研修に参加しました。1回生のときから毎年参加してきたので、今回は4回目で最終回となりました。

朝に大学に集合し、バスで三重県鈴鹿市に向けて出発します。途中、名阪上野忍者ドライブインで休憩をとりながら、引率の先生方と今後の天気や日程のことなどをお話ししました。再びバスに乗り嵐前の晴空を眺めながら、友人が持ってきた謎の信玄餅を食べながら、鈴鹿市にある“鈴鹿サーキット交通教育センター”に向かいます。

到着後は、昼休憩として乗車前の腹ごしらえに唐揚げ弁当をいただきました。研修開始までの時間はセンター内のテラスから遠くに浮かぶ雲を眺めたり、友人との談笑などを楽しみました。

安全運転研修の内容としては、ウォーミングアップ、ABSの体験、凍結路面の体験、サーキット走行の4部構成でした。

“ウォーミングアップ”では、センター内の外周コースを周回して、車に慣れる、道に慣れる、ペアとのコミュニケーションに慣れることを行いました。ここでは、スムーズなアクセル・ブレーキ操作、カーブへの適切な入射角とスピードを学びました。

“ABSの体験”では、センター内の直線コースを時速30～40kmで直進し、前方に設置された信号機が点灯するタイミングで急ブレーキをかけるということを行いました。ここでは、停止距離の算出、公道での車間距離の重要性を学びました。

“凍結路面の体験”では、ツルツルのタイルが敷かれた路面に水を撒いて人工的に作られた凍結路面と同条件のコースを“FF車のシビック”、“MR車のバモス”、“MR車かつ横滑り防止装置装備のS660”の3車種で後輪



▲スキッド走行

を滑らせて走ることを行いました。“シビック”は前輪駆動でそこそこ滑るが、滑りすぎとまではいかない。“バモス”は後輪駆動かつ、車高が高いため3車種の中では一番横滑りを体感できました。“S660”は後輪駆動だが横滑り防止装置が付いているので、滑らないと思っていたら、まあまあ滑りました。日常走行では問題なしでも凍結路面となると安心はできないということがわかりました。

サーキット走行では、インストラクターの方々から先導して頂き、鈴鹿サーキットのメインストレートへ向かいました。そこでは、各々好きなところで写真を撮ったり、集合写真を撮りました。サーキット走行は1人2周走りました。私たちのペアは先導者の後ろという1番良いポジションで走行しました。私は最初は助手席側でペアに対して、ラインのズレや車間距離の遠近等を話しながらコース内からの景色を楽しんでいました。私が運転の際は、4年目の集大成という気持ちで、しっかり先導者と同じラインを走行し、踏むところは踏み、抜くところは抜き、横Gをしっかり身に染み込ませることができました。

安全運転研修の全てのスケジュールを終え、バスで大阪方面へ向かいます。途中の針テラスで休憩をとりながら、今回のツアーの思い出話をして帰りました。

例年では、今回行った内容に加えて、ホテルでの宿泊、夕食バイキング、ピット見学、コントロールタワー見学、遊園地でのゴーカートなどのアトラクション等を2日間で楽しむツアーでしたが、今回は台風の接近のためスケジュールを凝縮して決行して頂きました。今年で最後だったのでまた来年とは言えませんが、次回開催に参加できる人は参加してください。損はしません!!



▲ホームストレート

(デザイン工学部 情報システム学科)

# 東京証券取引所と各種メディア見学会

八野 悟

僕は9/19～9/20まで大学企画の東京証券取引所と各種メディア見学会に行きました。この日は平成最後の夏休みでその日に東京に行けたことはとても嬉しかったです。

1日目の朝9：10、まだラッシュで人が多かったJR新大阪駅の千成ひょうたん前に集合しました。みなさんわくわくした表情でした。朝9：40「のぞみ6号」に乗車しました。車内でお弁当が配布されました。僕は事前に新大阪で買った柿の葉寿司とともに昼食を食べました。新幹線はしばらくすると富士山に近づいたのですが残念ながら山頂のところに雲がかかっていて見られなかったです。そして昼12：13に東京駅に到着しました。お昼なのに駅にはたくさんの人が歩いていました。「さすが東京だ。」と思いました。東京駅に着くと東京メトロ丸ノ内線に乗車しました。丸ノ内線は他の電車とは違い、車両が小さく作られていました。一駅乗って銀座駅で日比谷線に乗り換えました。新型車両だったので車内がきれいでした。約10分で六本木駅に到着しました。六本木は高層ビル街が立ち並ぶ場所です。ここでは東京ミッドタウン観光と目的のテレビ朝日見学がありました。A班とB班に分かれ僕はBだったのでまず東京ミッドタウンを見学し、後にテレビ朝日を見学しました。最初の時間は六本木をぶらぶらして歩きました。六本木にはadidas・オニツカタイガー・Reebokと言った有名ブランドの店がありました。東京にはそういうお店がたくさんあります。この日の東京は晴れていたので東京タワーが見えました。約1時間半の観光をして目的のテレビ朝日見学です。この日は9月17日に行われた「MUSIC STATIONウルトラFES」の後に見学でした。テレビ朝日といえば「ドラえもん」・「クレヨンしんちゃん」です。特に「クレヨンしんちゃん」は今年の7月に声優が替わって衝撃的だったかと思います。中に入るとまずニュース番組の「Ameba News」のスタジオ見学で24時間放送している場所でした。バック背景は六本木の道路でした。カメラなどたくさんの器具がありました。次のスタジオに向かう途中でお笑い芸人のタカアンドトシに遭遇しました。二人は「帰れマンデー見っけ隊!!」の収録だったそうです。「こんにちは!」と言ったら「こ

んにちは」と返答してくれました。次のスタジオは「羽鳥慎一モーニングショー」のスタジオでした。カメラがたくさんあり立っているだけで緊張が高かったです。キャスターの立ち位置から机の位置まで細かったです。

次の見学は僕が毎日見ている「報道ステーション」のスタジオでした。セットの後ろの花は365日毎日変えているそうです。「徹子の部屋」も出演者によって毎日花を変えているのです。これは1976年2月の放送開始以来同じ花を使ったことはないそうです。準備する側も大変と分かりました。廊下を歩いていると天候関連の部屋がありそこは24時間体制で動いているところでした。スタジオの裏ではマイクなどのいろんな機器がありました。見学が終わると日比谷線に乗って茅場町のホテルに向かいました。到着すると約5時間半の自由時間になりました。

僕は地下鉄東西線で大手町駅まで向かいました。東西線は首都圏のJR以外の電車では一番混雑率が高い路線です。大手町駅と東京駅は地下道で繋がっていたので利用しました。東京は関西と違い電車賃が安いですが、ICカード(ICOCA・Suica)を使うと1円単位での計算です。これはJRと他の鉄道会社との競合が激しいからです。

東京駅で東海道線に乗車しました。さすが首都圏です。車両は15両のうち2両がグリーン車という組み合わせです。しかも帰宅ラッシュで車内は大混雑でした。新橋駅で下車しました。次に乗ったのはゆりかもめでこれは大阪というニュートラムと同じ方式で線路がなくタイヤで走行する乗り物です。僕はフジテレビで有名なお台場に行きました。フジテレビ・自由の女神・アクアシティ・ダイバーシティ東京と充実した場所です。夕食はつけ麺を食べました。渋谷に向かうときには山手線を利用しました。東京観光するのに山手線は絶対に必要です。山手線があって周囲の電車が動かせるのです。2020年の東京オリンピックに向けて山手線の車内には防犯カメラがありました。渋谷に到着して、軽く歩きました。24時間365日動いているスクランブル交差点は人々が行き来していました。特に今年9月13日に開業したばかりの渋谷ストリームにいきました。と

てもきれいな場所で飲食店やブランド店が立ち並んでいました。渋谷川沿いもきれいになっていました。この場所は現在地下化された旧東急東横線の渋谷駅を再開発した施設です。オリンピック以降も渋谷は発展します。次に向かったのは新宿です。渋谷から湘南新宿ラインで行きました。こちらも15両のうち2両がグリーン車です。新宿駅は世界一乗降客数が多い駅でギネス認定されています。新宿は出口が100か所以上といい、大阪では考えられません。しかも西口と東口を直線で結ぶ通路がなく、雰囲気全然違います。西に都庁・東に歌舞伎町。歩くだけで疲れます。東京駅へ中央快速線に向かいました。21:40ごろなのに車内は人でいっぱいです。東京駅に到着しても駅構内は人でいっぱい。山手線・京浜東北線は終電まで混んでいます。東京駅は地下ホームが2つあります。成田空港に向かう電車と東京ディズニーランドに向かう電車があります。大手町駅まで歩き東西線で茅場町に戻りました。

2日目です。朝はホテルのバイキングでした。読売新聞のある丸の内まで東西線で大手町駅まで向かいました。駅から読売新聞まで遠く10分くらい歩きました。東京の地下は広いなと思いました。読売新聞では新聞がどのように作られて配達されているかと、記者会見体験をしました。世界と回線を使ってリアルタイムで作成しているのが驚きでした。社内もきれいでした。記者会見体験では「～～会社の〇〇です。」と言って質問をします。自ら質問をして記事が完成しました。新聞記者による原稿集めから始まり本社で編集会議を行い記事のレイアウトをして全国の発送所に伝達され配達所に行き配達員が各家庭に新聞を送るのです。いろんな人の支えや努力・思いが含まれている新聞はほんとに大事だとわかりました。昼食は東京駅八重洲口の大丸の12階のバイキングレストランで品数が大量でした。景色がよく新幹線はもちろんビル群が一望できました。おいしくて舌に残りました。いよいよ東京証券取引所見学です。入口には警備員がいてセキュリティが万全でした。日本の経済の心臓です。まず2階でビデオの証券取引所の歴史と役割を見ました。見終わるとニュースなどでよく見るマーケットセンターを見学しました。グル

グル回る電光掲示のチッカーが新たな株式を表示していました。最後に株式模擬売買です。車会社・銀行・ガス会社の株を次々に表示される為替や世界の景気をもとに売買します。株の上昇・下降が激しく売買するのはとても難しいとわかりました。一番お金を増やしたのは国際学部の子でした。経済をもっと知るべきだとわかりました。その後東京駅に戻り少しだけお土産を買う時間を設けられました。僕は東京駅八重洲地下街にあるお土産店で買いました。その場所は僕が東京に来たら絶対買うお店です。今年の4月に1回来ています。僕は従業員の名前を覚えました。また絶対就活生になるまでに可能な限り東京に足を運びたいと思います。

最後に、僕は国際学部なので詳しくはわかりませんが経済・経営学部の人(留学生も含む)は是非行ってほしいです。ほんとに勉強になると思います。「申込が嫌」「お金ない」と思いがちですがこういう企画に参加するのもためになります。恐らく異文化も感じるかもしれません。今しかできない・学生でしかできない体験をしてほしいと思います。引率の先生方に感謝します。最後に東京最高!!



(国際学部 国際学科)

# 神戸港の各種施設見学会の感想

劉 俊俊

私の故郷は港の近くです。初めて近距離でコンテナターミナルを見たのは今年の夏休みでした。その時、一番驚いたのはガントリークレーンでした。こんな大きい機械が作られる人間の熱意に感心しました。また、大学の学部生時代に、同級生の神戸港クルーズの風景を撮った写真を見たことがあって、その時から神戸港はどんな感じかなと思っていました。大学院に入学以来、初めて神戸港見学会の知らせを聞いて、わくわくしながら、学会事務局に申し込みをしました。

当日の朝8時45分に学校に集合して、夕方17時ごろ住道に帰りました。すごく充実した1日でした。この貴重な一日の喜びと、驚きを皆さんと一緒に分かち合おうと思っています。

学校から1時間半ぐらいバスに乗ってやっと神戸税関に着きました。バスの中で浜崎先生から、より良い見学するためのポイントや見学時の注意点、国際物流における日本の位置づけなどのレクチャーがありました。事前に見学先のことを学習することや見学のマナーの大切さを知りました。神戸税関の担当の方はすごく優しいです。今回の参加者は留学生が多いことを知っているから、税関紹介のビデオを見る時に「中国語で流しましょうか」と聞いてくださいました。全体的な説明もわかりやすい日本語でしていただきました。このおかげで「税関の人は厳しくて怖い人」という印象が変わりました。ビデオの中で税関の仕事と役割を紹介してもらいました。税関の仕事の重要性と責任の重さが良くわかりました。その後、神戸税関広

報展示室でブランド品の偽物と本物を比較したり、ワシントン条約で禁止される野生動物、例えば、象の足で作られた椅子とか蛇の皮で作られたベルトとかを見てすごく可哀想と思いました。また、不正薬物の「運び屋」にもびっくりしました。鉱物の中に入れるとか麻薬探知犬に見つけられないように密封の箱や密封の袋に隠されることなど、税関の仕事の大変さ、ただの書類チェックだけではなくて、いろんな知識と知恵が必要なことと危険性が高い仕事ということがわかってきました。

昼に神戸港バイクルーズに到着しました。神戸メリケン食堂でおいしい食事をいただいて、ちょっと休憩を取りました。その後、周遊船に乗って神戸港内にあるハーバーランド、川崎重工、三菱重工、神戸空港、神戸大橋などを見学しました。当日はいい天気でした。淡路島も良く見えました。三菱重工の造船所はガントリークレーンがすごく大きいです。かっこいいなあと思って、つい写真を撮りました。神戸大橋もすごく美しく見られました。神戸空港の航空滑走路が面白いです。海の上で半分架け橋をしている。「不思議やね」と私と先生と一緒に感心しました。海王丸の船は大きくて帆はいっぱいでなんかワンピース(アニメ)のルフィーの船のことを思い出しました。途中、先輩は他の船の人と手を振っていました。私も真似しました。向こうに反応してもらった時はすごくうれしかったです。海岸には学校があります。学生の若い女の子が私たちに手を振ってくれました。なんかこの子は私たちよりフレンドリーです。おもしろかったです。



最後に上組コンテナターミナルを見学しました。下車した時、故郷以来の巨大なガントリークレーンを見たたん、写真を撮りました。やっぱりこれは最高です。会社の建物の中でコンテナターミナルの姿を見ながら港運部の仕事の内容を教えてもらいました。コンテナの並び方や運営方針もわかりやすく説明してもらいました。最後にはバスに乗って現場に回って見学を許可していただいてガントリークレーンについても説明してもらいました。本当にありがとうございます。

今回の見学のおかげで国際物流のことにもっと関心が持てました。将来この業界で活躍したいと思っています。



(大学院 経営・流通学研究科)

# 学園創立90周年記念JAXA見学会ツアー

中村 詩祈

私は宇宙について興味があり、この二日間の見学ツアーをととても楽しみにしていました。一日目にはまずTeNQという宇宙ミュージアムに行きました。ここでは、楽しみながら宇宙を体験することが出来る施設で、人類がこれまで宇宙について研究してきたことや、技術の発展の過程も体で感じる事が出来ました。



施設に入ってまず、壁一面にプロジェクションマッピングでこれまでの宇宙開発の歴史や、宇宙の映像が流れ、幻想的な空間を体験しました。

そのあと入った部屋では、円形の大きなスクリーンを見下ろす形で鑑賞し、まるできれいな地球の姿を、私自身が宇宙から見下ろしているような体験をすることが出来ました。

他にも、月面を歩いているような写真を撮影出来たり、自分に似ている宇宙人は何か調べるブースなど、とても楽しむことが出来ました。

そしてTeNQでは「星の王子様」の展示も行われていました。このお話は個人的に大好きで、その作品の中に自分が入ったような体験をすることが出来ました。



この施設はショップもとてもかわいく、宇宙モチーフのグッズや、宇宙食なども取り扱っていて、最後まで楽しく過ごせる施設でした。ゆっくりと見たかったのですが、すぐに時間が過ぎてしまい、少し悔しく感じました。

夕方からの秋葉原は、とてもディープな街で、いろいろな格好をした女性や大きなゲームセンターなど、日本のサブカルチャーの文化がとても感じられる街でした。

夜泊まるホテルに行くため、つくば駅に行きましたが、つくば駅の看板に宇宙飛行士の絵が描かれていて、つくばに来たんだなと気分が上がりました。

二日目のJAXAではまず、入口にあるロケットを見て、改めてこんなに大きなものを宇宙に飛ばすことが出来る技術のすごさを感じました。



JAXAのツアーでは訓練室や本物の宇宙服を見ることが出来、宇宙飛行士になる方たちの訓練や、宇宙から帰ってきた後、体を地球に適応した状態に戻す訓練、国際宇宙ステーションで行っている業務など、詳しく知ることが出来ました。宇宙服は想像していた以上に大きく宇宙で人間の体を守る宇宙服の機能の高さも知りました。



ツアーの中で、宇宙食の展示がしているところがあり、宇宙食は日本のモノが多く、国際宇宙ステーションで働いている皆さんの食を支えているのが日本のものであることに嬉しく感じました。

展示場では、JAXAが開発した人工衛星がそのままのサイズで展示してあり、他にも、国際宇宙ステーションにある日本の実験棟「きぼう」のレプリカに乗り込むことができ、宇宙飛行士が実際に仕事をしている場所を見ることが出来ました。そして展示場では、JAXAのOBの方から実際に展示物を説明していただけるツアーも行っており、とても勉強になりました。

JAXAのツアーの中に管制室を見学出来るところがありました。

私は、JAXAのイベントや、説明会に参加した経験があ

り、その時にお話したことのある女性がその中で仕事をしてられました。その方が実際に仕事をしている姿を見ることが出来て、とても嬉しく、私もそんな仕事がしてみたいと感じました。

残念だったのが、JAXAの社員さんの食堂でお昼ご飯を食べることが出来なかったのが心残りです。次はプライベートでもう一度いきたいなと思います。

二日間の見学ツアー、とても楽しむことが出来勉強になりました。そして、幼いころからあこがれていたJAXAに行くことが出来て、とても嬉しかったです。これからのさらなるJAXAの技術開発に期待したいと思います。

(工学部 機械工学科)



# 芸術鑑賞巡り(富山)感想

吉田 旭宏

今回、私たちは富山県にある「富山市ガラス美術館」、  
「富山県美術館」、「富山ガラス工房」を訪れました。これ  
らで実際に見て、触れて、体感したことを、私が代表して紹  
介させていただきたいと思います。

はじめに私たちが訪れたのは、富山市ガラス美術館で  
す。ここでは、展示作品もさることながら、建築物としても素  
晴らしいものとなっています。設計者は、2020年の東京  
オリンピックで使用される新国立競技場を設計した隈研  
吾さんです。隈研吾さんの建築では多くの木材が使われ  
ていますが、この富山市ガラス美術館もその一つで、広い  
空間に多くの木材が使われており、まるで大きな木の中  
にいるみたいでした。そんな建築としても美しい富山市ガ  
ラス美術館の中には、多くのガラスアートが展示されてい  
ます。私たちが訪れた時は「富山ガラス大賞展2018」が  
開催されていました。そこで展示されていた作品は、私が  
以前まで持っていたガラスの概念を大きく変えてくれました。  
ガラスアートは二度と同じものは生まれず、その作品  
が魅せるものは世界のそこにしかないと思うと、さらに美  
しく思えました。



次に私たちが訪れたのは、「富山県美術館」です。この  
美術館はとても広く、ゆっくり見ていると軽く半日は過ぎ  
てしまうほどです。富山県美術館には「オノマトペの屋上」  
という屋上があり、アートを全身で体験することができます。  
富山県美術館では、このような体験型アートが多く、

普通の美術館とは違った楽しさがあります。その一つが、  
身体の動きで光のアートを創り出すインタラクティブア  
ートです。インタラクティブアートというのは、私たちでも実  
際に何らかの形でアートに参加できたりすることです。富  
山県美術館では、全身を使い壁に映るキャンパスに絵を  
描くというものを体験できます。私も友だちと三人で体験  
してみましたが、三人とも思い思いに身体を動かし、最後  
に出来上がったものはごちゃごちゃで何とも言えないもの  
になりました。それでも、体験していた私たちや、それを見  
ていた人も楽しそうでした。そのような空間を作ることが  
できるのもインタラクティブアートだからこそだと感じまし  
た。



二日目、私たちが最後に訪れたのは、「富山ガラス工房」  
です。ここでは、職人さんの指導の下、吹きガラスを体験で  
きます。まず、どのような形にするか、色や模様はどうする  
かなどを決めます。この工程で作品のクオリティは大きく  
左右されるため、私は真剣に考えました。デザインが決ま  
れば、実際に工房に入りガラス吹きをやっていきます。職  
人さんの指導があるとはいえ、どの作業も難しく終始緊  
張してしまいました。吹きガラスは、サイズが大きくなるに  
つれて作業が難しくなります。前日に行った富山市ガラス  
美術館では、大小さまざまな吹きガラス作品がありまし  
た。大きいものでは人の体を超えるようなものもありまし  
た。高い技術と濃い経験が必要な伝統工芸への理解が、

今回のガラス吹き体験でさらに深まりました。



今回、一泊二日の富山県芸術鑑賞巡りでしたが、この

大学生活での大きな思い出になると思います。その理由として、富山県には私の頭に刺激を与えてくれるものばかりでした。目でものを捉えるだけでなく、全身を使ってアートを感じることをここまでできたのは、私自身今回が初めてでした。大阪に戻ってきてからでも、あの時、見たもの、体験して感じたことなど鮮明に思い出すことができるほどです。しかし、それは私一人だったらここまで思うことはありませんでした。一緒に行ってくれた友人や後輩、他の学部の生徒と、同じ時間を共有できたからこそここまで楽しめました。この芸術鑑賞巡りに参加できて本当に良かったです。

(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

# コンテスト報告



コンテスト報告

Report of the Academic Society Contests

平成30年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)努力賞作品  
『海と空と橋と…』  
丸野 大樹(工学部 交通機械工学科)

# コンテスト報告

平成30年度 企画委員長 青山 一樹

## 第19回「ぶんかくコンテスト」

(長編部門/短編部門)

## 第3回「写真・イラストコンテスト」

(写真部門/イラストデザイン部門)

## 第2回「見学会プランニングコンテスト」

大阪産業大学学会では、例年、学部生・大学院生を対象に学会コンテストを実施してきました。

ぶんかくコンテストでは、これまで小説・体験・ショートショートを募集してきましたが、より広く様々な作品を募集できるよう、今年度より「長編部門」「短編部門」としました。

写真・イラストコンテストでは、学内にこだわらず風景写真を募集し、様々な写真の応募がありました。イラスト部門では、手書きで作成されたものや、パソコンを用いて作成されたものなど、多様な作品の応募がありました。

また、昨年度より実施しました「見学会プランニングコンテスト」は、今回2回目となりますがたくさんの応募がありました。次年度以降も、学生がより興味をひくよう工夫を凝らしながら、引き続き継続していきたいと思えます。

大阪産業大学学会  
コンテスト2018  
Osaka Sangyo University Academic Society Contest 2018  
大阪産業大学学会 主催

Let's try! 日頃書き溜めている文章やデザイン、写真などをご応募ください

募集内容  
ぶんかくコンテスト 長編部門・短編部門  
写真・イラストコンテスト 写真部門・イラストデザイン部門

応募期間 2018年7月9日(月)～9月28日(金)

応募締切日厳守  
※土日祝は受付できません  
※7月17日(火)、8月3日(金)は事務局不在のため受付できません  
※8月4日(土)～9月20日(木)は夏期休業中のため受付できません

優秀賞 3万円  
奨励賞 2万円  
努力賞 1万円  
参加賞 (ジャンル別賞状 総大賞金5万円!!)

主催: 大阪府立 芸術文化センター  
大阪産業大学学芸部 (〒590-8565 大阪府吹上区吹上1-1-1) 吹上校舎3階学芸部  
TEL: 072-875-5331 | FAX: 072-875-5331 | 吹上校舎3階学芸部 | TEL: 072-875-5331

▲2018年度学会コンテストチラシ

## 大阪産業大学学会コンテスト2018実施結果

### 第19回 ぶんかくコンテスト実施結果

募集期間	2018年7月9日(月)～2018年9月28日(金)
募集内容	長編部門・短編部門
審査	書類審査 2018年10月10日(水) 最終審査 2018年10月16日(火)
応募件数	長編部門……2件 短編部門……2件

#### 〈受賞者一覧〉

【優秀賞】…該当なし

#### 【奨励賞】

橋本 龍太郎(人間環境学部 文化コミュニケーション学科)

作品：仮初の夢の中に絶望(長編部門)

#### 【努力賞】

東野 博之(デザイン工学部 環境理工学科)

作品：濡標(長編部門)

筒井 三太(デザイン工学部 情報システム学科)

G-SIX(短編部門)



▲東野博之さん、橋本龍太郎さん、筒井三太さん

#### 〈審査委員〉

田口まゆみ、曾我千亜紀、リングホーファー・マンフレッド、孫銀植、堀古秀徳、鈴木雄也、信吉史明、米田昇平、韓福相、福井清一、小川雅司、田村誠

(順不同、敬称略)

### 第3回 写真・イラストコンテスト実施結果

募集期間	2018年7月9日(月) ～ 2018年9月28日(金)
募集内容	写真部門……………風景写真 イラストデザイン部門…デッサン、イラスト、学会見学会のキャラクターデザイン、4コマ漫画、風刺画
審査	書類審査 2018年10月10日(水) 最終審査 2018年10月16日(火)
応募件数	写真部門……………10件 イラストデザイン部門… 5件

#### 〈受賞者一覧〉

##### [写真部門]

##### 【優秀賞】

楊 慶竜(人間環境学部 文化コミュニケーション学科)  
作品：黄昏の川

##### 【奨励賞】…該当なし

##### 【努力賞】

丸野 大樹(工学部 交通機械工学科)  
作品：海と空と橋と…

松浦 拓真(デザイン工学部 情報システム学科)  
作品：自然が織り成す世界

SINGHAVONG LOUANGSADED  
(工学部 電子情報通信工学科)  
作品：Beauty of Modernization

嶋田 萌(工学部 機械工学科)  
作品：こんにちは

中村 七海(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)  
作品：零れ桜

高阪 美咲(人間環境学部 文化コミュニケーション学科)  
作品：芽吹き

張 輝(経済学部 経済学科)  
作品：夕日の下



▲楊慶竜さん



▲丸野大樹さん



▲松浦拓真さん



▲嶋田萌さん



▲SINGHAVONG LOUANGSADEDさん、中村七海さん



▲高阪美咲さん



▲張輝さん

[イラストデザイン部門]

【優秀賞】

大西 叶恵(デザイン工学部 情報システム学科)

作品：自然ということ

【奨励賞】

藤田 佳奈恵(経済学部 国際経済学科)

作品：桜の彩る風景

【努力賞】…該当なし



▲大西叶恵さん

▲藤田佳奈恵さん

〈審査委員〉

ダニエル・チューバー、田中譲、横井豊彦、高橋徹、中川等、塚本直幸、堀越亮、大津山澄明、大橋美奈子、  
山下典彦、鈴木晶雄、青山一樹

(順不同、敬称略)

---

2018 第2回 見学会プランニングコンテスト実施結果

---

募集期間 2018年10月9日(火)～11月9日(金)

募集内容 日帰りを実施可能な見学会プラン

審査 書類審査

2018年11月16日(金)

最終審査

2018年11月20日(火)

応募件数 12件

〈受賞者一覧〉

【優秀賞】

大田 愛依(スポーツ健康学部 スポーツ健康学科)

河野 純平(スポーツ健康学部 スポーツ健康学科)

プラン名：日本のスポーツを支えるシューズを探る

【奨励賞】

楊 慶竜(人間環境学部 文化コミュニケーション学科)

プラン名：名古屋現代産業の旅

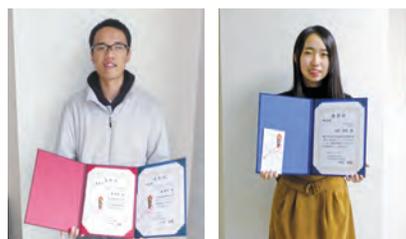
【努力賞】

田村 結菜(経済学部)

プラン名：岡山学習体験ツアー



▲河野純平さん、大田愛依さん



▲楊慶竜さん

▲田村結菜さん

2018年11月7日(水) 浜松の芸術見学会 参加者9名



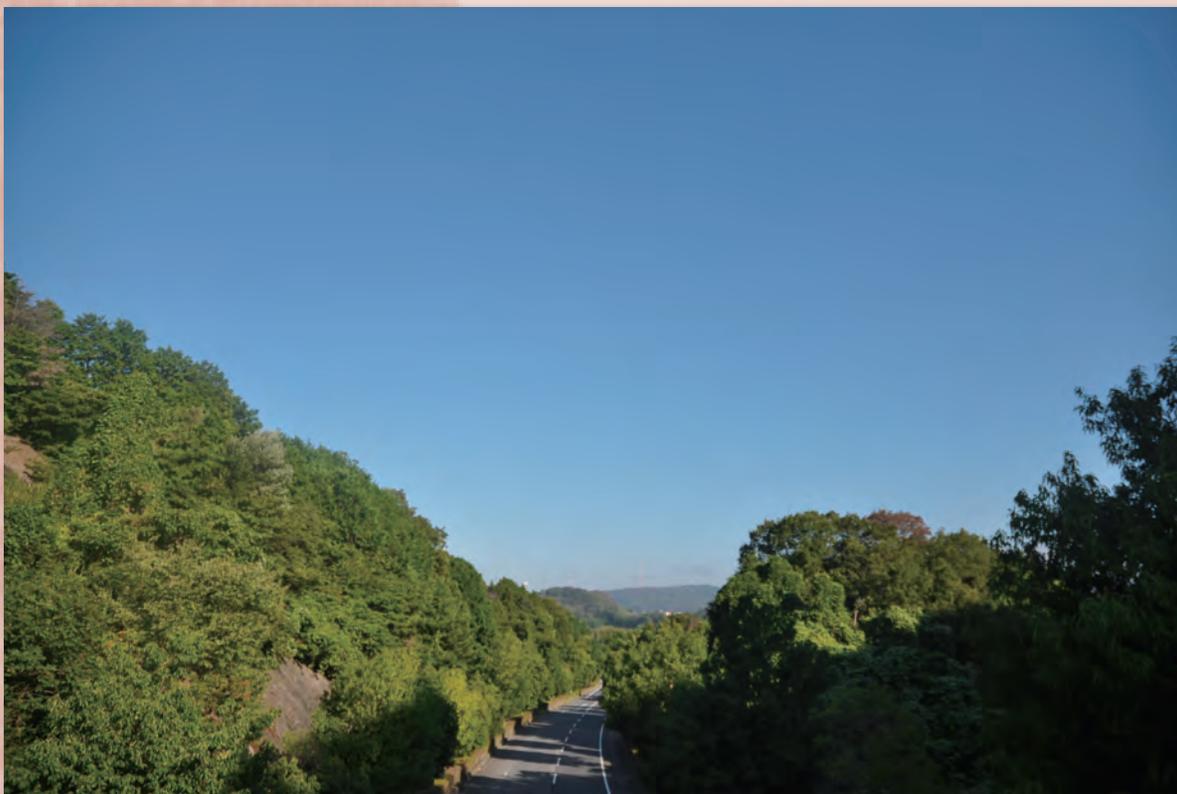
---

---

# 留学記

---

---



留学記

Study Abroad Report

平成30年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)作品  
『道』  
東 啓示(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

# 海外留学記『オーストラリア国立大学』

工学部 電子情報通信工学科 教授 部谷 学

出張者は、平成29年5月12日から平成30年2月28日までのおよそ300日間、オーストラリアの首都であるキャンベラの中心部にあるオーストラリア国立大学に留学をしました。研究テーマは『集光太陽熱を用いた水素製造の効率化を目指した酸化セリウム( $\text{CeO}_2$ )の焼結機構の解明』でした。研究は、Wojciech Lipinski教授、Antonio Tricoli准教授の指導の下、Michael Gao氏(博士後期課程学生)とともに行いました。

図1に水素ガスの製造の反応過程をしめします。高温において $\text{CeO}_2$ の酸化還元反応を繰返しおこなうことで、水素ガスを連続して生成できます。この水素ガス製造を効率化させるために、 $\text{CeO}_2$ 以外の新材料や新製造手法の研究開発などが精力的に行われています。

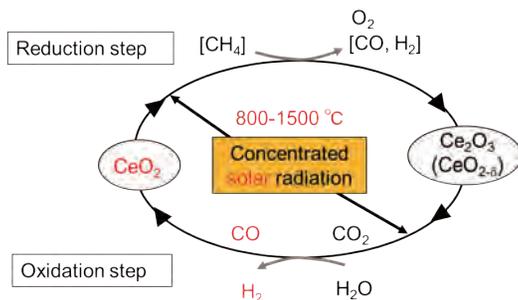
研究室に配属されて、指導教員から、『詳細な研究計画を作ってください』とアドバイスを受け、共同研究者であったMichael Gao氏が執筆した論文を渡されました。この論文では、 $\text{CeO}_2$ 粉末を使って、異なる表面性状をもった粉末を何種類か製作し、これらの水素ガス製造量を比較していました。ナノ構造を有した $\text{CeO}_2$ 粉末がもっとも性能が高かったのですが、その性能はわずか数サイクルで低下し、市販の $\text{CeO}_2$ 粉末と同程度でした。逆に、市販の $\text{CeO}_2$ 粉末は最初の反応サイクルから水素ガス製造量が安定していました。材料としての新規性は低いものの、性能が安定していることから、市販の $\text{CeO}_2$ 粉末を使った研

究をすることにしました。

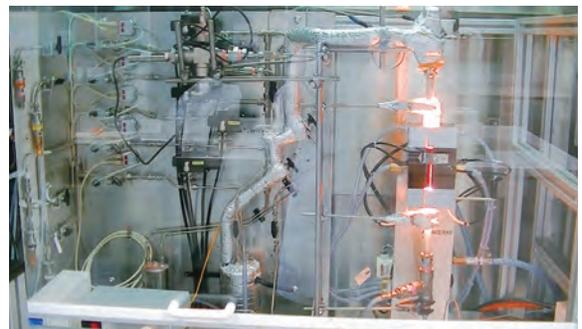
ナノ構造をもった $\text{CeO}_2$ 粉末の表面積が、焼結によってすぐ低下してしまうという事実を知り、まずは焼結機構について調べる必要があるのではないか、と思うようになりました。高温でのセラミックス粉末の焼結機構は、古くから研究されています。しかしながら、先行研究の多くが化学反応を伴わない、単純な加熱のときの焼結に関するものでした。そこで、私は、二段階水素製造反応時において、市販の $\text{CeO}_2$ 粉末の焼結機構の解明に取り組むことにしました。

研究計画を立案する際に、指導教員からほとんどコメントがないまま、私のプランを基に研究を進めることとなりました。研究の新規性に確信がもてないままでしたので、これで大丈夫のかな?と、心配になることがよくありました。私が在籍していたグループでは、指導教員と研究員あるいは学生はほぼ対等な関係にありました。私が日本の大学で博士後期課程の学生であったころの指導教員と学生の関係性の違いに驚きました。留学先の研究室では、自主的な取り組みや当事者の考えが尊重されている印象を強く感じました。ただ、自ら何も動かなければそのままほっとかれるな、という危機感も同時に感じました。実際に、突然大学に来なくなる人もいましたが、特に気に留めている人もいない印象を受けました。

実験は単純なものでした。電気炉および赤外加熱炉(図2参照)で市販の $\text{CeO}_2$ 粉末を加熱・焼結させ、その後、粉末のBET装置による表面積計測やX線回折装置に



▲図1 集光太陽熱を用いた二段階水素製造の反応過程。酸化セリウム( $\text{CeO}_2$ 、左側)を太陽光で800-1,500°Cまで加熱すると、酸素ガスを放出して $\text{CeO}_2$ が還元され、 $\text{Ce}_2\text{O}_3$ (右側)になります。還元された $\text{Ce}_2\text{O}_3$ に二酸化炭素ガスや水蒸気を接触させると、酸化されて再び $\text{CeO}_2$ に戻ります。酸化されるときに燃料となる水素ガス( $\text{H}_2$ )や一酸化炭素ガス( $\text{CO}$ )を製造できます。



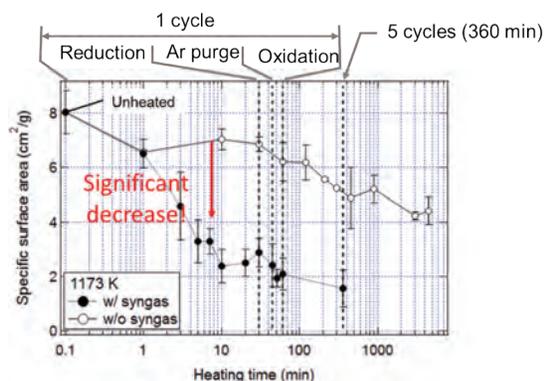
▲図2 赤外加熱炉の外観写真。オレンジ色に光っている部分が赤外線加熱炉です。

よる構造解析を行いました。電気炉では単に加熱のみ、赤外加熱炉では高温に維持した状態で酸化還元反応をおこさせて粉末サンプルを焼結させました。これらを比較することで、焼結機構の解明を試みました。

単純な実験でしたが、実験条件(加熱温度、加熱時間)を変えて、膨大な数のサンプルの実験・計測を行う必要がありました。各装置には使用記録簿がありましたが、ある時期はHeya Manabuという名前ばかりという遇もあり、朝から晩まで単純作業を繰り返しました。また、使用した装置の取扱い説明書も作成し、ほかのユーザの方々にも使ってもらいました。これによって、ほかの研究グループの学生とも話すようになり、私が困ったときに助けてくれることもありました。

図3にCeO<sub>2</sub>粉末の表面積変化に関する実験結果をしめします。●は水素ガス発生を伴う場合、○は水素ガス発生を伴わない単純な加熱実験の場合の表面積変化です。水素ガス発生を伴う場合、表面積が反応直後わずか10分間で急激に低下し、その後は、あまり変化しないことがわかりました。水素ガス発生を伴わない場合(○)の焼結機構は粒界拡散であることが知られています。このことから、水素ガスを伴う場合は、粒界拡散よりも焼結速度が速い、蒸発拡散による焼結が支配的ではないか、と推測しています。

この原稿を執筆中の今は、えられた研究成果をまとめて、論文投稿の準備を進めております。研究に取り組んだ当初は、新規性のある研究成果がえられるかどうか、半信



▲図3 水素ガス発生あり・なしにおけるCeO<sub>2</sub>粉末の表面積の変化。●の水素ガス発生を伴う場合、表面積がわずか10分間で急激に低下しました。

半疑でした。図3の実験結果の1つのデータ点は5-10回の実験の平均値をプロットしています。1回の実験と計測に半日程度かかりますので、このグラフを作るだけで2か月程度の時間を必要としました。私が取り組んだ研究分野は新材料や新製造法に関する研究が主流ではないか、と思います。ですので、単純な実験をこれだけの数をこなした例がなく、新知見をえることができたと考えています。当たり前だと思えることでも、ちゃんと繰り返すことの重要性に気付かされました。

最後に、現地の生活を通して感じたことについて述べたいと思います。

・ビザ取得：とにかくビザの取得が大変でした。私がビザの申請準備をしていたころ、オーストラリアのビザのシステムが大幅に変更になり、ビザ取得に時間がかかるようになったという話を聞きました。結果、ビザ取得に5か月かかりました。早くから準備していたつもりでしたが、ビザ申請の準備はかなり早くから取りかかるとよいと思いました。

・英語：とにかく苦勞をしました。この数年で取り組みはじめた研究分野の研究所に留学したため、専門用語もあまりわからない状態での研究活動でした。初めて英語を学ぶときに、発音をしっかりマスターしておく必要性を強く感じました。LとR、thとs、など、中学校のときにちゃんと発音を学んでおけばここまで英語に苦勞することはなかったんだろうな、と感じました。家族と一緒に留学したのですが、小学校に通っていた長男と次男の英語の発音は、私の発音よりはるかにネイティブに近いものでした。

・レンタカー：アパートのオーナーの自家用車(25年程度前の日本車)をお借りしました。走行距離は約33万kmでした。エンジンオイルはかなり漏れ、オートマなのにエンストするという、なかなかの車でした。オーナーは、高校生のときに買った車をまだ使用していました(オーナーは70歳ぐらいのかたです)。古くても大事に使うという、その姿勢に刺激を受けました。

・バスや郵便：車をレンタルするまではバスを使っていました。バス停に行きますと、時刻表には到着時刻±15分

という内容が書かれていました。マイナスの場合もあるのか、と衝撃を受けたのを覚えています。また、郵便の場合に不在者通知をいれてもらえない、ということが何度かありました。サービスは日本のほうがよいのは間違いないですが、このような状態でも現地の方々はあまり気にしておらず、生活のリズムがゆったりしている、と感じました。日本とオーストラリアを足して2で割ることができればいいのに、と感じました。

- ・車での移動：無料のハイウェイがあり、都市部以外はほとんど信号がなく、交通渋滞もほとんどありませんで

した。一日1,000km移動しても信号をみなかったという日もありました。また、車で郊外を走っていると、動物をみる機会が多くありました。道路の側で生きているカンガルー、車に轢かれたカンガルーをたくさんみました。夜の車の運転は少し命がけですので、オーストラリアで車を運転するときは、移動に必要な時間など、下調べが必要だと感じました。圧巻は、ある飼育エリアからほかの飼育エリアに移動する1,000匹以上のヒツジの群れをみたことでした。日本では考えられない風景でした。

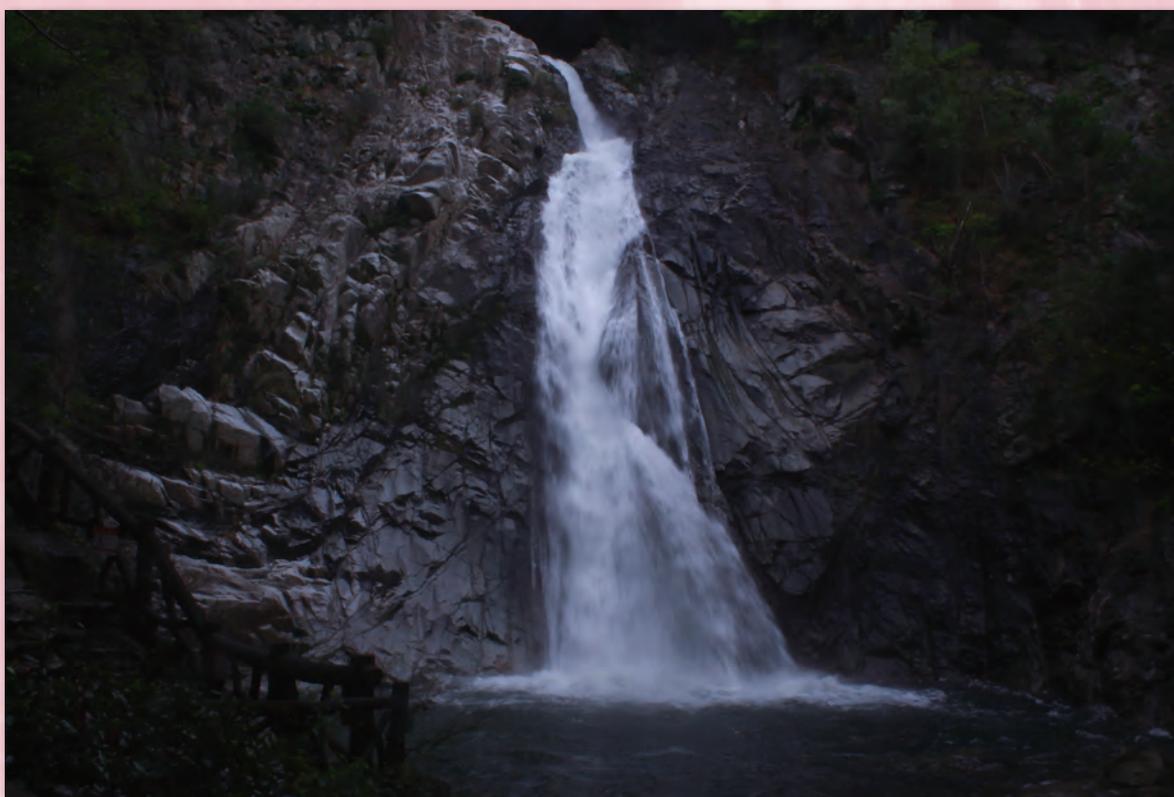
---

---

# 学術研究書出版助成本の概要

---

---



学術研究書出版助成本の概要

Financial Aid for Publishing

# 医療現場の「意図せざる結果」はなぜ生まれるか

スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 教授 横井 豊彦

本書は、著者の経営学の博士論文を再構成したものである。本書の根底にある問題意識は、「認知症患者は、何故増えるのか?」という素朴な疑問である。

一般には「高齢者が増えるのだから、認知症患者が増えるのも当然」と解釈されるところ。実際、ある疾患の患者数が増加する場合、公衆衛生学の視点の一つとして、「患者が病院に行っていない」ため、特定の時期に何らかのきっかけで患者が「掘り起こされる」場合を想定する事がある。認知症患者数の場合、そのきっかけは、2000年の介護保険法施行であると考えられる。しかし、そこから10年以上経過した、論文執筆時点で、高齢者人口の増加率を上回る速度で認知症患者が増えている。

経営学の視座・研究の潮流の一つに、「意図せざる結果」の概念がある。古くは、アメリカの社会学者であるロバート・K・マートンが、第二次世界大戦前に提唱した概念であり、特定の集団・組織が、何らかの目的(=意図)を持って起こした行動が、本来の意図とは異なる結果をもたらす論理に立脚した視座である。同じくマートンが提唱した、「機能・逆機能」の観点からは、「意図せざる結果」は必ずしも逆機能ではない点に注意する必要がある。

また、この「意図せざる結果」の概念は、近年、別の問題の背景の概念としても登場する。ハーバード大学の精神科医で人類学者でもある、アーサー・クラインマンが、グローバル・ヘルスの中の医療問題が帰着する論点の一つとして、世界的な医学雑誌“The Lancet”で取り上げているのである。

以上の事から、「認知症患者が増える」という現象が、単純に老年人口が増えるという疫学的な捉え方だけでは、説明がつかない事が理解可能である。そこで本書では、「認知症患者が増える」という現象の背景には、「意図せざる結果」の論理が存在する事を仮定し、経営学の視点から分析を試みた。

「意図」という言葉は、日常的に使用されるが、「意図せざる結果」を分析する場合には、「誰」の意図として捉えるかを設定する必要がある、更に、「結果」を出す行為主体

は、意図した「誰」と同一とは限らない。また、「意図」が客観的要素(例えば法律などの制度や、特定の物)を多く包摂している場合でも、「結果」は行為主体の有する主観性(解釈や好み)に依存する場合も考えられるため、「間主観的」な視点を有する。

本書の場合も、「意図」する行為主体は厚生労働省と捉え、公的なホームページや文書の公開情報へのアクセスに加え、聞き取りを行った、また、メインとなる生起過程の調査対象は、焦点化すれば「診断過程」であり、その過程は医師の思考の中に存在すると捉えられる。加えて、「意図」する行為主体である厚生労働省が、「専門の医療機関」で「専門の医師」に診てもらう事を推奨している事から、大学病院で認知症診断を行っている医師をメインの調査対象とした。

「意図せざる結果」の生起過程には、診療科(本書では老年内科と精神科)、医療機関の立地(都会と田舎)によって違いが見られた。その違いについては、筆者の予測を遥かに超えた実情を述べて下さった、医師達の言説を参照頂きたい。本書では、生々しい声を、出来る限りそのままの形で記述してある。

最後に、それらの言説の背景には、普段の生活の中で一般の方が殆ど意識される事はないであろう、医師達の“Profession”が明確に存在していた事をお知らせしておきたい。



# グローバル化とその反発 — 生活・移動・通商

経済学部 経済学科 教授 富澤 拓志

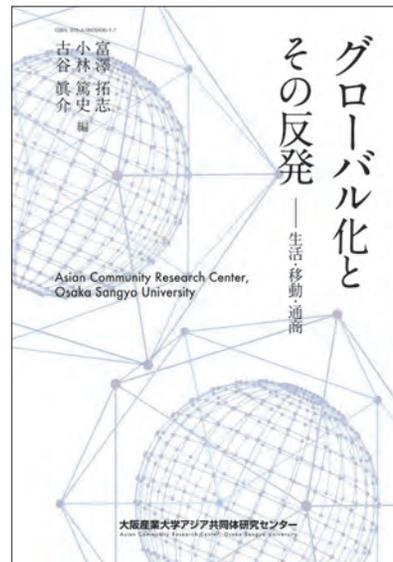
本書は、本学アジア共同体研究センター（ACRC）が2017年度に行った国際シンポジウム「グローバリゼーションとその反発」の報告と、そこでの議論に基づいて生み出された論文を集めた報告集である。

2005年の設立以降、ACRCは単行本を3冊公刊しているほか、各国の大学、研究機関とともに、毎年研究会や国際シンポジウムを開催しており、2017年3月にはシンポジウムの成果を踏まえた研究報告集を発行した。この研究論文集はそれに続くものである。

ACRCが取り組んでいる大きな研究主題は、アジア的多元性の下で国際協調を達成するにはいかなる枠組みが必要かという問である。この問の追究で考慮されるべき国際環境はACRC設立当時から近年大きく変化しており、欧米を中心に深まりつつある反グローバリズムの動きと大国中国の登場という新たな情勢を考慮せざるを得なくなっている。このような状況の中で、アメリカと中国という2大国の狭間の地域はどのような選択を迫られ、またいかなる協調体制を作ることが出来るだろうか。20世紀後半に成立した自由貿易の理念と体制は、21世紀に入ってどのような変化を迫られているのだろうか。本書はこのような問題意識に基づいて「グローバリゼーションとその反発」というテーマを掲げ、第1部「グローバリゼーションとその反発」、第2部「日系企業と植民地—台湾製糖業を事例に—」、第3部「中国・東アジア経済」の3部構成とし、同名のシンポジウムに参加した内外の研究者の論考15

編を納めている。

最後に、本書は大阪産業大学学会の出版補助を受けて刊行された。これに関連するACRCの研究活動と国際シンポジウムも同学会による支援を受けている。ここに記して謝意を表したい。また、本書第1部の主題設定と人選にあたっては、大阪産業大学のみならず天津理工大学、河南大学などの海外協定校、国内他大学にも協力をいただいた。関係の先生方には改めて深く御礼申し上げたい。また、シンポジウムの開催に当たっては、多くの方からご協力をいただいた。ここに記して御礼を申し上げる次第である。



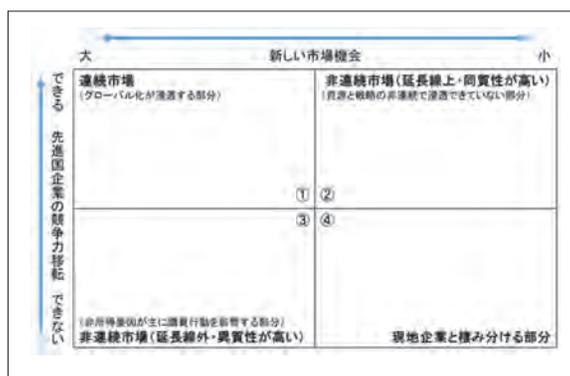
(大阪産業大学アジア共同体研究センター)

# 新興国企業の成長戦略

—中国自動車産業が語る持たざる者の強み—

経済学部 国際経済学科 准教授 李 澤建

2000年代後半、日本では、新興国市場戦略論に関する関心が高まり、研究業績が次第に蓄積されるようになった。しかし、既存研究では、新興国について、厳密な定義が欠如したまま、主に高い経済成長率を見せた国々を中心とする感性的な認識に基づき、各対象市場の構造の相違や特質が企業成長に対する影響という具体論より、むしろ各国の諸相を捨象して、対象市場を中身にとまわらない、同質な「点」として扱う傾向が強い。したがって、新興国市場のもつ高成長性をいかに企業戦略に取り入れるかという前提に立つ議論は多かった。



1980年代後半以来、日本企業が本格的に数多くの海外直接投資を展開してきた。いわゆる「新興国市場」という研究対象が、これまでの先進国市場、もしくは発展途上国市場に比べて、どこにその違いがあるのか。この問いについて、明白な答えを示そうとする研究は、管見の限り、見当たらないし、存在するとしても、依然試行錯誤段階にあるものであろう。

もう一点が時期の問題がある。つまり、新興国市場戦略論がなぜ2000年代後半になってから出現したのかという問いである。現在新興国として広く報道された中国に対して1990年代から日系企業がすでに本格的に展開してきた。2000年代を挟んで、何かが変わったに違いないが、既存研究では価値実現に繋がらない、いわゆる何かしらの原因がもたらした結果に対する検討に留まっており、本国資源に基づく先進国多国籍企業の競争優位が新興

国市場において、発揮できないとき、一から新規の資源開発が必要と、解を求める。その指摘は理解できるが、その「新規」とは一体何が何に対する新しさという問題とはともかく、企業の内部要因に目を向けて議論することだけに限界がある。なぜなら、既存研究のほとんどが所得要因を重んじており、新興国市場の市場を暗黙にピラミッド構造と想定しているからである。例えば、池上(2011)が新興国の市場構造について、高利益率のハイエンド・アッパーミドル部分、低利益率のミドルエンドと日本企業が単独では利益創出困難のローエンド部分からなるピラミッド構造との解析がその一例である。しかし、現実では、民族や宗教などの構成要因の多様性に、地域的に異なる消費市場が存在していること(川端, 2010)、必ずしも贅沢することを良しとしない従前の価値観を大切にするような文化要素の存在(岩垂, 2011)、移行経済諸国に見られる計画経済と市場経済といった異なる経済制度の併存(田島, 1998; 塩地, 2002)などの要因を考えると、新興国市場の構造は所得要因によって区別された各レイヤー(層)からなるピラミッド状より、複数の特性を持ち合わせる各々の小片からなる立体的なモザイク状のほうが実態に相応しいのであろう。そこで、日本企業の価値実現がなぜ困難に陥ったかという問題へ接近するためには、企業の内部要因把握と同時に、モザイクな市場特性がもたらす影響も併せて検討する必要がある。本書の軸は、新興国地場企業の成長戦略⇔モザイクな市場特性⇔多国籍企業の価値実現との間の事実を分析し、その因果関係(地場企業の外部性)を浮き彫りにする点にある。そのため、第一部では、先進国多国籍企業の価値実現にとって、異質性になりうる環境要因を析出する。続いて、第二部においては、第一部での到達点を踏まえて、中国民族系自動車メーカーの急成長の要因について、企業内部に何が起こったかを把握する。最後に、結語として先進国多国籍企業にとって経営資源の非連続性のもつ市場において、成長を遂げた新興国企業の成長過程を観察することで得られる含意を簡単にまとめる。

- ・池上重輔(2011)「新興国市場の『ボリュームゾーン』攻略とブルー・オーシャン戦略」『国際ビジネス研究』3(1), 1-18頁。
- ・岩垂好彦(2011)「モザイク模様のインド消費価値観：変わるインド、変わらないインド」『一橋ビジネスレビュー』59(3), 8-22頁。
- ・川端基夫(2010)「拡大するアジアの消費市場の特性と日本企業の参入課題」『経済地理学年報』56(4), 234-250頁。
- ・塩地洋(2002)「なぜ多種多段階?—中国自動車流通経路の形成と存続の論理」『産業学会研究年報』18, 1-16頁。
- ・田島俊雄(1998)「移行経済期の自動車販売流通システム」『中国研究月報』52(6), 1-30頁。



# 都市農業はみんなで支える時代へ

—東京・大阪の農業振興と都市農地新法への期待—

デザイン工学部 環境理工学科 教授 石原 肇

人口減少に伴い、全国的にみれば、地方創生が喫緊の課題となっている。東京や大阪といった大都市が無縁のことかといえばそうではなく、人口減少に伴う都市の縮退への対応も喫緊の課題となっている。このようなことも背景にあり、都市農地・農業は、環境保全や防災、教育等の多面的機能を有することから、都市において極めて重要なものとなっている。2015年4月に都市農業振興基本法が公布された。その後、2016年5月には、都市農業振興基本計画が閣議決定された。この基本計画では、「都市農地はあるべきもの」とされ、例えば、市街化区域から市街化調整区域への逆線引きの促進、老朽化した建物のある土地の農地への転用など、これまではみられなかった土地利用に関する記述があり、政府が都市農業に関して根本的な転換を図ろうとしていることが伺われる。

1990年以降の都市農業に関する地理学研究をみると、生産緑地地区については1992年の改正生産緑地法施行後2000年代半ばまでに調査が行われており、2010年以降の状況は反映されていない。また、大都市地域における農業を対象とした研究についてみると、個別地域の農業の存続基盤や持続性を考察したものが多く、さらに、近年注目されている六次産業化や農商工連携に関する研究については、それほど多くの蓄積には至っていないものと思われる。全国的にみて、農家戸数が最も少ないのは東京都で、次いで大阪府が少ない状況にある。東京都では、奥多摩町や檜原村と離島を除いた地域が、ほぼ都市農業の行われている地域といえる。大阪府は複数の町村があるものの、隣接する府県の都市化の状況をふまえると、ほぼ全域が都市農業と呼べると考えられる。そこで、本書では、日本の三大都市圏のうち首都圏の中心をなす東京都と近畿圏の中心をなす大阪府を主たる研究対象地域とし、1990年以降の都市農業の変化の地域的特性を把握するとともに、具体的な農業振興や農地保全の取組みについて把握することを目的とした。

本書では、まず東京都や大阪府の都市における農地としての土地利用が1992年の改正生産緑地法の施行から

どのように変化をしてきているかを把握し、その上で、産業としての農業がどのように変化し、農業と都市住民との関わりがどのように変わってきているかを把握した。東京都の個別の地域を対象としたものは、あえて現代にも生き残る市場出荷型産地を取り上げている。近年の首都圏の都市農業に関する研究は、都市住民との交流に着目したものがほとんどだと思われる。農業の根幹である生産に着目し、1990年以降も市場出荷型産地として生き残っている姿を記した。一方、近年、近畿圏における都市農業に関する研究は少ない。大阪府の個別の地域を対象としたものは、農業の基盤となる農地の多くが水田であるという自然条件や都市住民等との関わり方が東京都とは異なることから、都市住民等との新たな連携の姿を現場の動きから記した。

なお、本書では、都市農業は園芸が重視されており、個別の地域の基幹となる品目である野菜(東京都江戸川区、清瀬市、東久留米市、大阪府堺市、八尾市)、花き(東京都東村山市)、果樹(大阪府柏原市)を取り上げている。また、近畿圏は水田が多いことから、稲作中心の地域(大阪府東大阪市)も取り上げ、主要品目は網羅している。

終章では、2017年の生産緑地法改正や2018年の新法である都市農地の貸借の円滑化に関する法律の制定および相続税納税猶予制度の改正について、都市農業の従来からの課題を解決するために、どのような対応が図れるのかといった視点から整理した。このことは、今後の都市農業振興基本法に基づく「土地利用計画」の策定の参考になるものとする。



# 路面電車レ・シ・ピ 住みやすいまちとLRT

デザイン工学部 環境理工学科 教授 塚本 直幸

## 1. 本書の概要

本書「路面電車レ・シ・ピ 住みやすいまちとLRT」は、路面電車がどのようにまちの魅力を高めているかについて、欧州と日本を事例として述べ、次に、路面電車の発展型であるLRT(Light Rail Transit)を日本の都市に導入することの意義との方策について、まちと交通について関心のある人々を対象として、わかりやすく解説したものである。

本書は4つの章により構成されている。

第1章では、欧州の9つの地方都市をピックアップして、トラムを使ってまち歩きすることの魅力、トラムによる移動の利便性等について解説している。トラムが各都市の中心的な交通手段として機能している様子、日本とは大きく異なる歩行者優先の都市交通状況について、多くの読者に知ってもらいたい。

第2章では、日本の地方都市で暮らしに根付いた路面電車を紹介する。日本にも十数カ所の都市で路面電車が運行しているが、どれも魅力的で、それぞれのまちの特徴を表す乗り物である。都市ごとに独自の良さを持つと同時に、逆に問題をも抱えており、それらについてもふれる。

第3章では、LRTの導入がもたらすまちの変化について解説する。まず、人々が安全・安心にまち歩きを楽しみ、それがまちの活性化や環境保全につながる都市内交通システムのあり方について説明する。ついで、LRTのデザイン的な側面から、都市の景観や歩行者空間がどのように上質化されるかについて述べる。また、LRTに導入に伴って、歩行空間がどのように変わるのか、まちづくりやまちの交通について人々の意識をどう変革すべきかについて事例に基づいて解説する。

第4章では、自分の住んでいまちでLRTを実現するためには、何が必要かというテーマで述べる。まず、LRT導入のためにまちにはどんな条件があるのかを整理する。次に、LRTは道路上を走行するので、道路空間の再配分が必要であるが、それをどのように敷設するのかを解説する。また、導入するための各種制度や事業手法に基づいて、

社会的合意も形成しつつ導入するための手順や課題について述べる。

## 2. 関連する研究の経緯と本書の出版目的

本書は、筆者らがこれまでに進めてきた一連の「LRTとまちづくり」に関わる研究成果に基づいて、それらをわかりやすく一般読者向けに書き下ろしたものである。

都市交通問題解決、都市の再生・成長、環境保全という観点から、近年欧州諸国を中心に、世界的にLRTと呼ばれる新たな路面公共交通の開通や延伸が進んでいる。自動車に強く依存した都市交通体系から脱却し、都市交通混雑や交通事故の解消・減少、都市環境保全、まちのにぎわいの復活を目指すには、歩くことの復権が強く求められる。そうした観点から、路面電車は道路上を走行することにその特徴があり、「道を歩く」という行為を直接的にわかりやすい形で、補助・補完・拡張するための最も適切な交通手段であると考えられる。

わが国でも路面電車やその発展型であるLRTが目目されているが、その整備はあまり進展していない。その理由のひとつは、路面電車の整備と維持を促す法制度およびその実効性を担保する財源制度の不十分さがある。もうひとつは、都市交通政策と公的資金に基づいて路面電車を整備することの社会的合意が進んでいないことである。筆者らは、これまでこのような問題意識のもとで継続的に研究を進め、多くの学術的成果を上げてきたが、LRT整備が遅々として進まない日本の現状を踏まえて、社会的な理解度向上を目的として、一般市民向けに筆者らの学術的研究成果を社会的に還元しようとするものである。

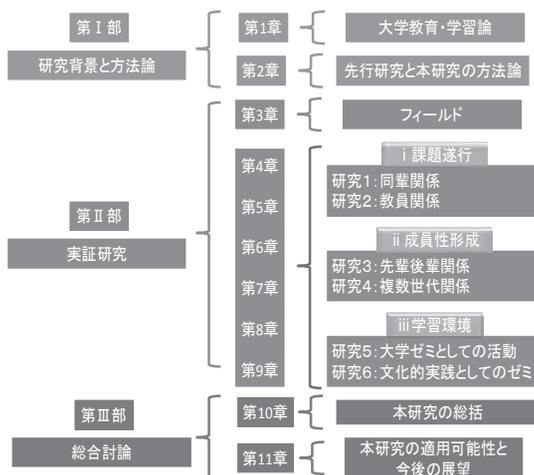


# 大学卒業研究ゼミの質的研究 先輩・後輩関係がつくる学びの文化への状況的学習論からのアプローチ

全学教育機構 高等教育センター 講師 山田 嘉徳

学習心理学には、状況的学習論と呼ばれる新しい研究領域が生まれ、従来とは異なる視点から学習過程が検討されている。近年、このパラダイムのもとでの大学教育に関する研究の蓄積がみられ、とりわけ大学教育におけるゼミの教育可能性を探る上での有効性が指摘されてきた。しかし、ゼミでの協同的な学びのプロセスについて経年変化を追いながら実証的に検討する研究は見当たらず、またそこで生じる学びを捉えるための方法論に関して十分に議論されてきたわけではない。そこで、20年余りにわたって継続している、先輩後輩関係を指導単位とする1つのゼミを題材に取り上げ、大学ゼミにおける学びを捉える視座を新たに提供することをねらいとした質的調査を実施した。分析の結果、学びを捉える6つのモデルが生成されるとともに、それらのモデルから大学における学生生活動団体などの比較的場の制約が緩やかな環境のもとで生じる学びについて新たに捉え直すことを可能にする視点を提示した。

本書の題目は、「大学卒業研ゼミの質的研究—先輩・後輩関係がつくる学びの文化への状況的学習論からのアプローチ—」である。下図の通り、「第Ⅰ部：研究背景と方法論（第1章、第2章）」、「第Ⅱ部：実証研究（第3章から第9章）」、「第Ⅲ部：総合討論（第10章、第11章）」から



▲図 本書の構成

構成されている。第Ⅰ部（第1章、第2章）では大学教育とそれをめぐる学習論、および先行研究と方法論についてまとめた。第Ⅱ部（第3章から第9章）では20年余りにわたって継続している1つのゼミを題材に大学ゼミにおける学びを捉える視座を新たに提供することをねらいとした実証研究を行った。第Ⅲ部（第10章、第11章）では本研究の総括を行うとともに本研究の適用可能性と今後の展望を述べる形で総合討論を行った。

初出一覧は、以下の通りである。

- 第1章 書き下ろし
- 第2章 書き下ろし
- 第3章 (第2節のみ) 田中俊也・山田嘉徳 (2015). 大学で学ぶということ—ゼミを通じた学びのリエゾナー (pp.98-114.) ナカニシヤ出版
- 第4章 山田嘉徳(2011). 卒論テーマの協同形成過程における質的検討—大学ゼミへの参与観察を通して— 心理学叢誌, 5, 109-118.
- 第5章 山田嘉徳(2011). 卒業論文を書き上げるまでの逡巡過程—指導教員との関係からみた参加軌跡の径路多様性— 心理学叢誌, 6, 85-97.
- 第6章 山田嘉徳(2011). 先輩後輩関係を指導単位とするゼミ制度の有効性に関する一考察—B&S制度における協同的な学びに着目して— 京都大学高等教育研究, 17, 1-14. 山田嘉徳(2012). 世代交代を伴うゼミにおける成員性の形成過程—「連続性と置換の矛盾」に着目して— 心理学叢誌, 7, 57-68.
- 第7章 山田嘉徳(2012). ペア制度を用いた大学ゼミにおける文化的実践の継承過程 教育心理学研究, 60(1), 1-14.
- 第8章 書き下ろし
- 第9章 山田嘉徳(2013). 先輩後輩関係が文化的知

識の継承に及ぼす効果ーゼミ共同体の事例検討からー 知識共創, 3, III5-1, 1-10.

第10章 (第1節のみ) 田中俊也・山田嘉徳 (2015).  
大学で学ぶということーゼミを通じた学びのリエゾンー (pp.144-147.) ナカニシヤ出版

第11章 書き下ろし

なお本書は、2013年に筆者が関西大学大学院心理学研究科に提出した博士論文「大学ゼミにおける協同的な学びのプロセス」に大幅に加筆・修正を行い、書籍化したものである。また、本書を完成させるまでに平成24～25年度日本学術振興会特別研究員奨励費及び平成29～33年度日本学術振興会科学研究費(若手研究B)を受けることで、調査や成果発表が可能になった。刊行に際しては、平成30年度大阪産業大学学会「学術研究書出版助成」の交付を受けた。とりわけ、大阪産業大学学会ならび

に関する教職員の皆様には大変お世話になった。ここに記して、感謝申し上げます。





▲平成30年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)努力賞作品  
『夕日の下』  
張 輝(経済学部)

---

# 学会後援事業

---



学会後援事業

Academic Assistance

平成30年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)努力賞作品  
『芽吹き』  
高阪 美咲(人間環境学部 文化コミュニケーション学科)

# EIM(Exercise is Medicine) Taiwanに出席して

大学院 人間環境学研究科 嶋田 愛

## はじめに

2018年4月27日～29日の3日間、台湾、新北市において、第1回EIM Taiwanが開催され、私たちは、佐藤真治教授に同行し、下記の活動を行った。

## EIMとは

世界有数のスポーツ医学分野の学会・アメリカスポーツ医学会(ACSM)が取り組むプロジェクトEIM(Exercise Is Medicine)は、運動療法を普及し、地域で歩く人を増やし、「運動を病気の治療と予防に役立てよう」という目標を掲げている。すでに40以上の国と地域が本プロジェクトに参加しており、2018年9月には、EIM Japanセンターが設立された。台湾では、新北市が中心となって、2017年にEIM Taiwanが設立されたが、今回その1周年を記念し、新北市(台湾最大の行政区)で第1回EIM Taiwan世界大会が開催された。

## 現地での活動

私たちは、世界大会の2日目に主会場で体操を披露した。今年の2月に台湾で大きな地震があったこともあり、震災復興の願いを込め、我々の体操が作られたきっかけである東北震災の復興支援の様子をまとめ、ショートムービーを作成し紹介した。実際の体操披露の場面では、会場全体が立ち上がり、我々と一緒に体操をおこなってもらえた(写真①)。さらに、翌日には私たちの体操の様子が現地の朝刊の1面を飾ったのは驚きであった。

## EIM on Campusとは？

EIMは、大学を中心とした健康増進活動プログラムEIM on Campusにも力を入れている。我々は、昨年よりプロジェクト共育・「歩く人 on Campus」の一環として、EIM on Campusに参加し、心疾患患者対象のスポーツリハビリ教室や地域住民対象としたウォーキングクラブを開催してきた。昨年には、この活動がアメリカスポーツ医学会に高く評価され銅賞を、今年は金賞を受賞するこ

とができた。

## その後の活動

今年の8月には国立台湾体育大学の学生が来日した。これは、EIM Taiwanでの学生の活躍を国立台湾体育大学の教員が会場で見ていることをきっかけに、実現した。学生たちは、我々と兵庫県豊岡市の地域での健康づくりを見学したのみならず、我々の心臓病のスポーツ教室の中でセルフマッサージを披露してくれた。さらには、我々が取り組むEIM on Campusにも強い関心を示していた。

さらに、10月には、我々が台湾へ出向き、新北市政府でEIM on Campusの成果を披露した。これもまた好評を博し、翌日にその内容が朝刊に再び掲載された(写真②)。

以上の経験を契機に、関わった学生たちは、専門のスポーツ科学に加え、語学・異文化にも興味を持つようになり、その後に積極的に勉強に取り組む様子が見られた。



▲写真① EIM Taiwan会場で体操を披露した



▲写真② 我々の活躍を伝える台湾の朝刊の一面

# 経済学研究科・研究会についての報告

大学院 経済学研究科 教授 福井 清一

経済学研究科では、2ヶ月に一度程度のペースで、研究会を開催しています。

今年度は、計5回、研究科教員6名、博士後期課程学生1名、および、外部の研究者1名による研究報告を企画いたしました。

このうち、10月23日(火)の第3回研究会におきまして、東京大学・経済学研究科・特任研究員の橋立洋祐氏をお招きし、“Image Concerns and Social Influences (イメージ(を懸念した)選好とソーシャル・インフルエンズ)”というテーマで報告をしていただきました。

招聘に当たりましては学会から報告者への謝金を補助していただき、経済学部からは、交通費を補助していただきました。

出席者は教員・学生合わせて13名です。

近年、不確実性下における人間の経済的行動を説明するための基礎理論である期待効用理論とは相容れない実験結果(最後通牒ゲームによる実験、アレによる実験等)が数多く提示され、不平等回避性、利他性、損失回避性などを考慮した人間行動を説明するために、プロスペクト理論などの新しい不確実性下の行動モデルが生み出されており、当該分野の研究が注目を集めています。

橋立氏の研究は、不平等回避性や利他性以外に自分に対する他人のイメージを考慮して行動するという、プロスペクト理論や不平等回避性の導入では説明できない人間行動のモデルを構築しようとした野心的な研究です。

報告後の討論では、活発な質疑応答が行われ、経済学研究科の研究・教育にとって有意義な研究会だったと考えています。



司会：中村徹氏、講演者：李炳采氏、総合企画：朴容寛氏



講演者：原田良雄氏、通訳：朴容寛氏



講演者：朴容寛氏



講演者：徐天堯氏

▲講演の様子

昨今、第四次産業革命が急速に進み、本格的にIoT (Internet of Things)、AI(Artificial Intelligence)、RPA(Robotic Process Automation)が導入され、働き方やマネジメントの改革など経営・流通のあり方が根本的に変わりつつある。例えば、インターネット・インダストリーによるマスカスタマイゼーションやIoT(Internet of Things)によるビッグデータ活用に基づく新商品、新サービスの提供、AI技術による物流効率化・サプライチェーンの最適化、RPA(Robotic Process Automation)ツールを活用し業務自動化を推進する業務改革サービスなどが時流になるうとしている。昨今の環境変化に応じて、いかに最適な経営・流通のマネジメントを組み合わせることができるかを中心に日韓共同学術講演会が2018年10月26日に行われた。

まず、韓国の国立忠南大学校経営大学院の李炳采氏が「AI時代におけるゲーム理論」に関して講演を行い、その後、大阪産業大学大学院経営・流通学研究科の原田良雄氏が「E-commerceにおけるAI活用」、同研究科の博

士後期課程院生である徐天堯氏が「AI時代におけるコラボラティブ・イノベーション」、そして、同研究科の朴容寛氏が「AI時代におけるリーダーシップのあり方」に関してそれぞれ講演を行い、同テーマに関する意見交換および質疑応答を行った。

まず、李炳采氏はAIを学習・推論・判断など人間の知能に似たはたらきが可能になるコンピュータに制御されたロボット、またはソフトウェアを作る方法であると定義した。これを経済学的な観点から見ると、インテリジェントヒューマンであるといえる。経済学ではすでに合理的なエージェントについて多くの研究があり、その包括的なアプローチの一つがゲーム理論であると言える。例えば、プレイヤー1には10ドルが与えられ、プレイヤー2によって自分の申し出が拒否されることはない独裁者ゲーム(Dictator Game)がある。もし、合理的なプレイヤーならば、プレイヤー1はプレイヤー2に一銭も与えないのが答えである。最後通牒ゲーム(Ultimatum Game)の場合は、プレイヤー1には報酬配分の提案権を、プレイヤー2

には提案された報酬配分への拒否権を与えるという2人2段階ゲームである。プレイヤー 1が報酬配分を決定できるが、プレイヤー 2が拒否したら2人とも報酬を失ってしまう。提案者のプレイヤー 1は自分の取り分を多くしたいが、プレイヤー 2が不公平な分け方を拒否する可能性がある。ところが、人間にとって何より大事なものは、インテリジェンス(Intelligence)という知能・知性だけではなく、心、愛ということである。よって、AIの目的は、ただ人間の合理性を模倣するのではなく、人間の実際の行動を模倣することが大事である。AIは人間行動に関するビッグデータを収集し、解釈することによって人間行動を模倣することである。

その後、原田良雄氏はビジネスにおけるAI活用分野には、既存業務の効率化や高度化、AIによる新規サービスの立ち上げ、ビジネスのスケール加速、リアル世界のインテリジェント化など四つがあることを指摘した。AIはネットショップと顧客との接点での支援、自動広告やパーソナルショッパーなどデジタルマーケティング、サプライ・チェーン・マネジメント(Supply Chain Management: SCM)や倉庫管理の効率化や高度化に活用される。ネットショップでAIを活用する方法としてECサイト上で接客するツール、商品をすすめるレコメンドエンジン、お客さまの行動などを分析するツールなどがある。例えば、eBayでは、コンピュータビジョンとディープラーニングを活かしてAIが画像から11億点超の中から欲しい商品を検索するサービス「Find It On eBay」を実施しており、ユーザーは自分が好きな商品をイメージで探すことができる。家具やインテリアなどを販売し、グループで4,000億円以上を売り上げるWest Elm(ウエスト・エルム)は、AIとソーシャルメディアの「Pinterest(ピンタレスト)」を活用してレコメンドする新しいECサービス「West Elm Pinterest Style Finder」を始めた。日本の事例としてはサイジニアが提供している「デクワス.VISION」が挙げられる。同社では、ユーザーが閲覧している商品画像をAIが分析し、イメージに近い商品を表示している。そして、ニトリは顧客の発注から商品出荷までの時間を短縮するために自社の倉庫にロボットを導入した。同社は2016年春ロボット

ストレージシステムを、2017年1月には自動走行ロボット「バトラー」を導入し、商品出荷にかかる時間短縮、人件費圧縮、人手不足解消、ピッキング作業者が商品のある場所まで向かわず手間が省ける効果を得ている。

徐天堯氏は、AI時代には新興企業と既存企業が資源を協調・共有し、全体にとって重要な価値を生み出すコラボラティブ・イノベーション(Collaborative Innovation)が必要であることを強調した。新興企業は新しい知識・技術を持ち、動きやすいが、資源が乏しいし、規模が小さい。その反面、既存企業は資源や経験が豊かであり、成功した製品やサービスやビジネスモデルがあるものの、サクセスシンドロームにはまってしまう、官僚主義やパターン化される可能性が高い。よって、新興企業はAI技術を発展させ、専門人材を育成し、技術の協調エコシステムを構築し、既存企業はコネクテッド・ワークフォース環境の整備を中心にコラボラティブ・イノベーションを実現する方が望ましい。新興企業と既存企業が互いの強みを生かしながら業界を超えて「Win-Win」の仕組みを実現するために、データを蓄積した企業は、AI分析を通じてビジネスパートナーに正確な推薦をすると同時に、市場に新たな需要を作り出す。AI時代には単純な肉体労働の大半は消され、人間と機械(AI)の境界線が融解するなど急激な変化が起こるので、専門人材の確保と迅速的な変化に対応し、柔軟に協調できる「コネクテッド・ワークフォース」環境を整備する必要がある。例えば、2017年中国スマート製造プロジェクトリストで、調味料業界の大手「恒順グループ」は、データを持つアリババ社と協力し、マーケティング効率を向上している。ターゲット顧客に焦点を絞った広告宣伝や調達コストの削減など全プロセスをオープンで透明化している。この醸造酢スマート工場により、食品安全の確保、生産力の向上、缶詰め効率を40%高め、生産スタッフは50%、在庫スペースは75%を節約している。このようにコラボラティブ・イノベーションにより、既存の「古い」企業は若くなり、新興の「若い」企業の規模が拡大する意味でケイパビリティ(Capabilities)を高めるようになる。

そして、朴容寛氏は2045年にはAIが人知を超える技

術的特異点であるシンギュラリティを迎えるようになり、ヒトは「作業」と呼ばれる仕事は行わなくなり、ヒトは主に経営・管理・運用するマネジメント、ヒトの感性が必要なホスピタリティー、未来へのチャレンジ精神と洞察力が必要な創造性を発揮する仕事を担うようになることを指摘した。この時代になると、AIはヒトが作ったプログラミング、アルゴリズムの通り、過去のIoTなどのデータを中心にその延長線上の漸進的イノベーション(Incremental Innovation)までもできるが、プログラミングやアルゴリズムを作成・運用・管理し、将来に当てはまる判断が必要な創発的イノベーション(Emergent Innovation)はヒトの役割になると語った。よって、AI等は、過去の事例分析やビッグデータ分析、ディープラーニングにより最適なアドバイスを、ヒトの意思判断の効率性をあげたり、ヒューマンエラーを解消したりして少子高齢化に伴う人手不足問題の解決など味方になる一方、人間の悪い部分を増幅してしまい敵にもなる可能性もある。例えば、ビッグデータの中に故意に不純物を混ぜるサイバー攻撃をはじめ、バイアスがかかる差別や過度なナショナリズムの増

幅、軍事目的のAIやロボット、テロリストによる悪用、また、プライバシー侵害問題などが挙げられる。ところが、データを与えるのは人間であるので、AI、IoT、ビッグデータ、ロボット自体の問題ではなく、実はこれらの技術を使うヒトの問題になる。従って、AI時代には、これらの諸問題を解決し、明るい未来を創造する倫理の問題とリーダーシップのあり方(Being of Leadership)が問われるといえる。ヒトはいかなる分野で、いかなる仕事をして、一人ひとりが自分の専門分野における意思決定をせざるを得ないので、誰でもリーダーであると言える。リーダーシップのあり方として問われるのは、問題を解決する能力(Capability)ばかりではなく、人格の高潔さ(Integrity)が求められる。リーダーは自己中心的に自分や自分の派閥の腹だけを肥やすのをやめ、少しは損になっても、自己犠牲になっても、「多くの人々」(the Masses)のために、社会や自然界のために貢献する「偉大さ」(Greatness)を発揮し、何をしてもどこにいても人格の高潔さを守ることが大事である。

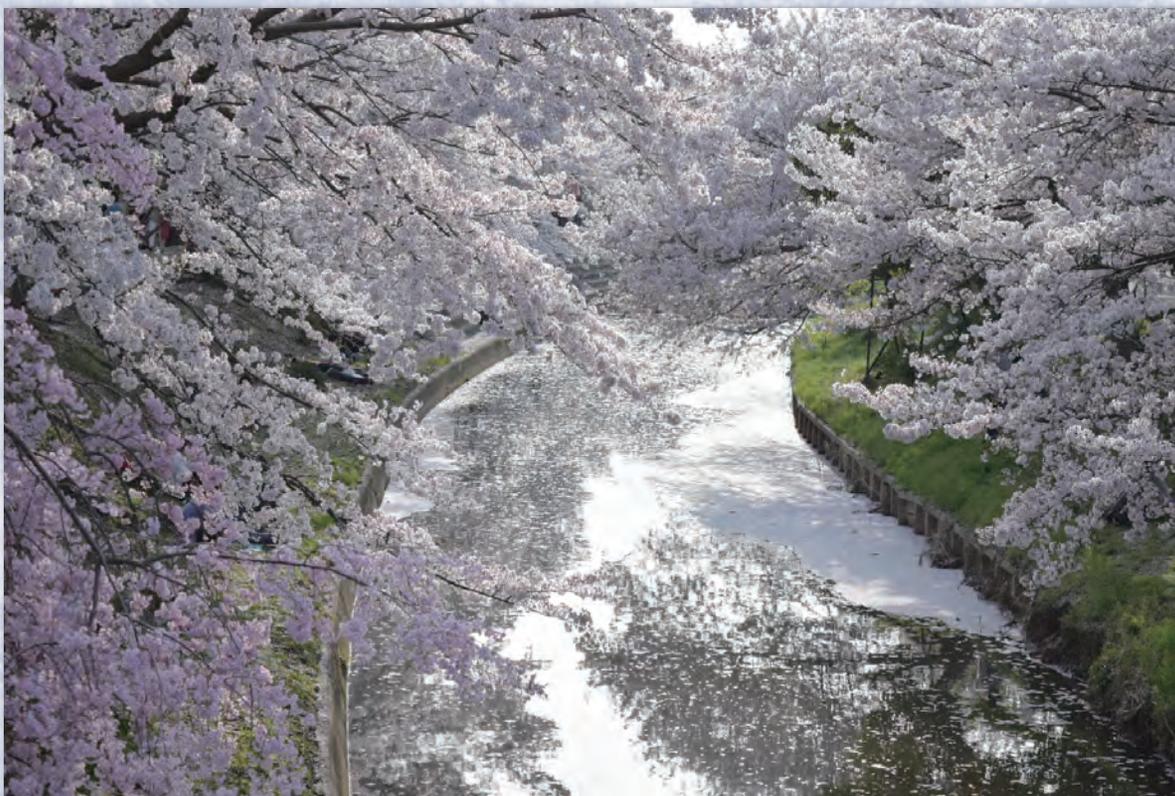
---

---

# 学会報告

---

---



学会報告

Report of the Academic Society

平成30年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)努力賞作品  
『零れ桜』  
中村 七海(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

# 平成30年度 年次報告

平成30年度 学会常任委員長 大津山 澄明

大阪産業大学学会は、学会会則の第2条に示しますように、学術・研究・教育の発展・普及と研究助成を目的としています。この目的を遂行するため、今年度も「大阪産業大学論集」「大阪産業大学学会報」の発行をはじめとしてさまざまな企画行事を行いました。

「大阪産業大学論集」は、各会員の研究成果等を公開する場として、例年以上に充実した論文等の発行を行いました。

「大阪産業大学学会報」は90周年の特集号として「明日への挑戦」「10年後の日本と世界、そして大阪産業大学」と題して取りまとめ、10年後の創立100周年を意識し、世界を視野に入れた大阪産業大学のあるべき姿を模索した内容になりました。「明日への挑戦」では、各業界で活躍しておられる大学OBによる挑戦の重要性を、「10年後の日本と世界、そして大阪産業大学」では、各学部の先生による長期展望に基づく見解を示していただきました。

特に今年度は学園創立90周年ということもあり、通常年度の行事に加えて、青柳美扇さんの興味深いトークと「書道パフォーマンス」、特大の作品として「夢 未来」と「阪駒祭」を揮毫していただきました。また、藤岡幸夫さん指揮による関西フィルハーモニー管弦楽団演奏の誰にも馴染みのある名曲が盛りだくさんの「クリスマスコンサート」を開催しました。オーケストラの重厚な演奏と藤岡さんのユーモアあふれるトークや指揮体験など、あっという間の1時間でした。この2つの行事に関しては、来場者も大変多く、「感動した」「貴重な機会だった」などの感想が聞かれました。

さらに、大学自治会主催で大量のLEDランプを使い、幻想的な「大学を彩るイルミネーション」の共催、本学園のスタートである「大阪鉄道学校」をイメージさせる、1/8サイズの鉄道模型を走らせ、新たな鉄道を目指す「OSU鉄道プロジェクト」、宇宙にロマンをはせる「JAXA見学会」など、これまでにない特別企画の行事を行いました。

通年と同様に、教員会員の研究・シンポジウム等への補助、学生会員の研究教育活動の助成、海外語学研修の

補助、学外見学会や各種コンテストも実施しました。運動を病気の治療と予防に役立てるという「EIM Taiwan」の学生参加の後援事業などがあります。さらに学術研究書の出版に関しては、これまで以上の助成を行いました。

学外見学会では飛行機好きにはたまらない「羽田機体見学会(JAL・ANA)」、自動車好きには「鈴鹿安全運転研修(鈴鹿サーキット)」、経済と社会に関心を持つ学生向けに「東京証券取引所と各種メディア(テレビ朝日・読売新聞)見学会」、芸術を好む者には「芸術鑑賞巡り(富山県立美術館・富山ガラス美術館・富山ガラス工房)」などそれぞれ1泊2日の行程で内容も充実していたと思います。

コンテストについては今年度も「ぶんかく」「写真イラスト」「見学会プランニング」の3種類について実施し、多くの参加があるなど定着して来た感があります。

また、財務状況を考慮しつつ適正な予算執行を行い、学会ホームページのさらなる充実と必要な規程改正等を行いました。

最後になりますが、今年度の学会活動を積極的に推進できましたのは、常任委員の皆様のご協力のお陰であると考えています。特に各委員長としてチーフ会で学会運営の舵取りをしていただいた、編集委員長の米田昇平先生(経済学部)、企画委員長の青山一樹先生(全学教育機構)、財務委員長の孫銀植先生(経営学部)、広報委員長の高橋徹先生(デザイン工学部)、法務委員長の田口まゆみ先生(国際学部)の各先生のご尽力に大変感謝しています。

また、教育研究推進センターの鳶崎敬司課長、学会事務局の桐本加奈さん、松村泰子さんには、学会事務運営に関して大変なお苦勞をお願いしました。この稿をお借りして厚くお礼を申し上げます。

(工学部 交通機械工学科 教授)

# 平成30年度 学会活動報告

## 【評議員会】

第1回評議員会	6月19日	議題①平成30年度学会行事予定表について ②平成29年度会計報告 ③平成29年度会計監査委員報告 ④平成30年度予算(案)について ⑤平成30年度の各委員の作業目標 ⑥その他
第2回評議員会	3月20日	議題①平成30年度活動報告 ②平成31年度チーフ会人事について ③平成31年度活動方針について ④平成31年度学会予算(案)について ⑤会則・規程集改正(案)について

## 【常任委員会】

新旧合同常任委員会 (評議員会終了後)	3月20日	議題①新旧常任委員の委員会及び役割分担決定 ②平成30年度委員から平成31年度委員へ引き継ぎ
------------------------	-------	---

## 【出版助成審査委員会】

第1回出版助成審査委員会	6月19日	議題①申請者一覧 ②出版助成申請書類一覧
第2回出版助成審査委員会	7月24日	議題①申請者一覧 ②出版助成申請書類一覧
第3回出版助成審査委員会	9月18日	議題①申請者一覧 ②出版助成申請書類一覧

## 【会計監査】

5月22日 平成29年度会計監査

## 【チーフ会】

第1回チーフ会	4月17日	第7回チーフ会	11月20日
第2回チーフ会	5月22日	第8回チーフ会	12月18日
第3回チーフ会	6月 5日	第9回チーフ会	1月22日
第4回チーフ会	7月17日	第10回チーフ会	2月19日
第5回チーフ会	9月18日	第11回チーフ会	3月 5日
第6回チーフ会 非商業出版助成審査	10月16日		

## 【編集委員会】

第1回編集委員会	4月17日	第6回編集委員会	10月17日
第2回編集委員会	5月22日	第7回編集委員会	11月20日
第3回編集委員会	6月 5日	第8回編集委員会	1月22日
第4回編集委員会	7月17日	第9回編集委員会	2月19日
第5回編集委員会	9月18日		

## 【平成30年度発行論集・学会報】

種 別	分 野	巻 号 数	備 考
論 集	経営論集	19-2・3合併号、20-1、20-2	年3回 原稿募集
	経済論集	19-3、20-1、20-2	年3回 原稿募集
	人文・社会科学編	33、34、35	年3回 原稿募集
	自然科学編	129	年1回 原稿募集
	人間環境論集	18・19	年1回 原稿募集
学 会 報		54	年1回 発行

## 【企画委員会】

第1回企画委員会	4月17日	第5回企画委員会	10月17日
第2回企画委員会	5月22日	第6回企画委員会	11月20日
第3回企画委員会	7月17日	第7回企画委員会	1月22日
第4回企画委員会	9月18日		

## 【企画事業】

### ◆学会コンテスト

- 第19回 ぶんかくコンテスト
- 第3回 写真・イラストコンテスト
- 第2回 見学会プランニングコンテスト

### ◆第3回 和菓子作り体験会 8月7日

叶匠壽庵で和菓子作り体験、ラコリーナ近江八幡散策

### ◆第7回 羽田機体工場見学会 8月29日～8月30日(1泊2日)

ANA機体メンテナンスセンター、JAL SKYMUSEUM 工場見学

### ◆第14回 鈴鹿安全運転研修 9月3日(今年度は台風の影響のため、日帰り開催)

安全運転研修、鈴鹿サーキット内交通教育センター研修

### ◆第5回 東京証券取引所と各種メディア見学会 9月19日～9月20日(1泊2日)

東京証券取引所、読売新聞東京本社、テレビ朝日見学

### ◆第5回 神戸港の各種施設見学会 11月2日

神戸税関、神戸港クルーズ、上組コンテナターミナル見学

### ◆学園創立90周年記念 JAXA見学会 11月4日～11月5日(1泊2日)

JAXA筑波宇宙センター見学、TENQ宇宙ミュージアム見学

### ◆第4回 芸術鑑賞巡り 11月6日～11月7日(1泊2日)

富山ガラス工房体験、富山市ガラス美術館見学、富山県美術館見学

### ◆見学会プランニングコンテスト優秀作品 浜松の芸術見学会 11月7日

ぬくもりの森散策、浜松市楽器博物館見学

## 【学会主催 学園創立90周年記念イベント】

10月30日 学園創立90周年記念 青柳美扇氏による書道パフォーマンス

12月4日 学園創立90周年記念 関西フィルハーモニー管弦楽団によるクリスマスコンサート

## <協賛>

11月2日～2月4日 学園創立90周年記念学生企画 大学を彩るイルミネーションへの助成

## <後援>

### ◆プロジェクト

4月1日 新入生歓迎企画「入学宣誓式プロジェクト」

◆講演会

10月26日 AI時代における経営・流通戦略に関する特別学術講演会への助成

◆活動への助成

4月27日～ 4月30日 EIM in Taiwanに参加学生の渡航費一部助成

10月23日 経済学研究科・研究会への助成

11月3日～ 11月4日 学園創立90周年記念学生企画 OSU鉄道プロジェクトへの助成

2月2日～ 2月5日 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 卒業研究優秀作品展への助成

2月6日～ 2月7日 デニム商品の川上から川下まで、および制服縫製工場見学への助成

【海外語学研修参加学生への助成】

平成30年度夏期海外語学研修参加学生への助成

【広報】

論集データベース改修

【法務】

規程改正検討

【財務】

毎月の学会会計処理(事務局)後に伝票の確認および預金通帳残高との照合(本会計)

【大阪産業大学学会会員一覧】

(人)

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
学生会員(院生)	136	113	108	114
〃 (大学生)	7,929	7,780	7,771	7,774
〃 (短大生)	27	1	— ※	— ※
正会員(専任教員)	230	226	218	218
特別会員	2	4	2	4
準会員(非常勤・卒業生)	21	25	21	21
名誉会員	10	9	11	15
賛助会員	1	1	2	1
計	8,356	8,159	8,133	8,147

12月末現在の会員数

※大阪産業大学短期大学部は平成28年度をもちまして、学生の募集を終了いたしました。

# 平成29年度 学会会計報告 (平成29年4月1日～平成30年3月31日)

平成29年度 財務委員長 齋藤 立滋

大阪産業大学学会の平成29年度の収支決算を以下の通り報告いたします。

収入の部では、学会費などの収入小計は昨年度に比べ1,602万円の減収となりました。これは、学会費の徴収方法が変わったからです。これまでは4年分を一括して徴収していましたが、平成29年度からは1年分ごとの徴収になりました。

支出の部では、支出小計が昨年度に比べて101万円の増加となりました。大きな要因として、ウェブサイト保守点検費の増加があります。Webサイトの改修をおこなったことで152万円の増加となりました。新しくなった学会のWebでは、学会の活動や行事案内をより積極的に展開し

ています。イベント費は560万円と昨年度より60万円ほど減ったものの、学生対象の各種見学会が数多くおこなわれました。一方で、諸活動費は291万円と昨年度より60万円ほど増えました。学会主催や各種団体、学部行事への援助をおこないました。

今年度も、各種見学会やコンテストなどのイベント、出版助成などの各種助成の活性化をはかる一方、学生表彰の新設など学生会員への会費の還元を務めました結果、次年度繰越金は2,638万円減りました。

今後、学会の諸活動をさらに活性化することにより、会員への会費還元を務めていきます。

## 【収入の部】

(単位：円)

科 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減
学会費(学生)	4,632,000	5,247,600	615,600
// (正・準)	1,181,000	1,181,000	0
受取利息	15,000	2,626	△12,374
雑収入	533,000	552,458	19,458
(小 計)	6,361,000	6,983,684	622,684
前年度繰越金	89,127,050	89,127,050	0
合 計	95,488,050	96,110,734	622,684

## 【支出の部】

(単位：円)

科 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減
論集発行費	7,500,000	3,240,777	△4,259,223
学会報発行費	1,700,000	1,514,697	△185,303
講演会費	1,500,000	872,392	△627,608
イベント費	5,500,000	5,601,988	101,988
諸活動費	1,500,000	2,914,181	1,414,181
海外留学補助金	700,000	700,000	0
出版助成	3,800,000	2,416,515	△1,383,485
ウェブサイト保守点検費	2,259,000	1,808,185	△450,815
人件費	5,700,000	5,167,724	△532,276
渉外慶弔費	250,000	50,000	△200,000
印刷製本費	300,000	304,555	4,555
通信輸送費	220,000	374,964	154,964
学生表彰費	1,600,000	1,750,000	150,000
その他(会議費、消耗品費等)	300,000	144,605	△155,395
(小 計)	32,829,000	26,860,583	△5,968,417
60周年記念事業繰入金	1,500,000	1,500,000	0
学園創立90周年記念事業費	5,000,000	5,000,000	0
次年度繰越金	56,159,050	62,750,151	6,591,101
合 計	95,488,050	96,110,734	622,684

# 編集後記

1928年(昭和3年)11月に創設された大阪鉄道学校を前身とする大阪産業大学は、本年度、創立90周年を迎えた。編集委員会は『大阪産業大学学会報』第54号を学園創立90周年記念号とし、二つの特集を組むことにした。一つは「明日への挑戦」とし、困難を乗り越えながら、日々精力的な仕事をされている卒業生4名の方から原稿を寄せていただいた。もう一つの特集は「10年後の日本と世界、そして大阪産業大学」とした。

現代において、日本と世界の政治、経済、社会の情勢は著しく流動化し、不確実性が増している。AIなど科学技術の進化は、われわれの日々の生活や仕事のあり方を大きく変えることが予想されるし、災害が多発するなどすでに想定を超える気候変動が生じている。また少子高齢化が進む日本では、社会の持続可能性が問われており、18歳人口の減少は2018年問題を大学に突きつけている。大阪産業大学は10年後に100周年という大きな節目を迎えるが、そのとき日本と世界は、そして大阪産業大学は、一体、どうなっているだろうか。本学には文系、理系の各分野の多彩な先生方がおられる、先生方はご自身の専門に即してどう考えるだろうか、聞いてみよう、となった次第である。各学部・学科の計9名の方々からそれぞれ大変興味深い原稿を寄せていただいた。また90周年記念号に寄せて、経営学部の朴容寛先生に本学の建学の理念である「偉大なる平凡人たれ」についての一文をご寄稿いただいた。特集にご寄稿くださった卒業生の方々と先生方にお礼を申し上げる。

このほか、学会関連イベントを報告してくれた学生、留学記や出版助成本の概要などを書いていただいた先生方、本号の編集・発刊にご協力いただいた編集委員の方々、またとくに精力的に編集の任にあたっていただいた学会事務局に深く感謝申し上げたい。

(平成30年度編集委員長：米田 昇平)

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced or transmitted, in any form or by any means, without prior permission in writing from the publisher.

## 大阪産業大学学会報 第54号 非売品

発行日 2019(平成31)年3月6日  
発行 大阪産業大学学会  
〒574-0013  
大阪府大東市中垣内3丁目1-1  
TEL (072) 875-3001 (大代)  
FAX (072) 875-6551  
印刷 友野印刷株式会社  
〒700-0035  
岡山市北区高柳西町1-23  
TEL (086) 255-1101  
FAX (086) 253-2965

